壹圓（濃紅色）	三十二年一月一日
壹　圓	大正二年十月八日 省令九五號
五圓（濃綠色）	四十一年二月二十日
拾圓（老紫色）	四十一年二月二十日

二十一年三月十日發行ノ壹圓切手印面及綠色ヲ改正ス印面ノ統一ヲ計ルタメナリ

高額郵便料ニ充ツルタメナリ

高額郵便料ニ充ツルタメナリ

現行切手に對して非現行切手なるものは明治三年六月の昔から大正十年三月三十一日に失效したもの迄の間に五十八種の多數を算するを得るのである、一つの切手の出生から死亡までの生涯を調て見ると或ものは全く闇から闇に葬り去られたものあり、或は十年、二十年の生命を保有したものあり、或は蜉蝣の夫にも例ふべく一ヶ月の命脈を保つたに過ぎないものもある、好古的の興味からして之を列記して郵便事業發達變遷の跡を偲ぶのよすがとして見たい。

非現行郵便切手の種類

本圖は郵樂會長木村梅次郎の好意によるものなり

1 明治四年三月發行

2 四年三月發行

3 四年三月發行

4 四年三月發行

5 五年二月發行

6 五年二月發行

7 五年七月二十日發行

8 五年七月二十日發行

9 五年九月發行

10 五年九月發行

11 五年九月發行

12 五年九月發行

〔一〕 手 切 の 代 時 沿 革

1 行政官布令 明治四年三月

2 行政官布令 明治四年三月

3 行政官布令 明治四年三月

4 行政官布令 明治四年三月

5 行政官布令 明治五年二月

6 行政官布令 明治五年二月

7 太政官布令 明治五年二十日

8 行政官布令 明治五年二十日

9 行政官布令 明治五年九月

10 行政官布令 明治五年九月

11 行政官布令 明治五年九月

12 行政官布令 明治五年九月

本図は『郵便の歴史』（郵政省郵政研究所編）から転載した。

種類	發行年月日	廢止年月日	使用禁止年月日
五十文（薄黃地文字黃色）	三年六月（缺日）	單ニ雛形ニシテ製作セシモノノ如シ	
百文（白地文字暗紅色）	同		
二百文（青地文字黑色）	同		
五百文（紅地文字黑色）	同		
1 四十八文（薄赭色）	四年三月（朔日）	四年三月（朔日）	二十二年十一月三十日
半錢（薄赭色）	五年四月（缺日）	五年二月（缺日）	同
9 半錢（薄赭色）	五年九月（朔日）	八年二月四日	同
半錢（淡黃色）	八年二月四日	九年五月十七日	同
五厘（淡黑色）	九年五月十七日	九年五月十七日	
2 百文（青色）	四年三月（朔日）	五年二月（朔日）	二十二年十一月三十日
5 壹錢（青色）	五年二月（缺日）	五年七月二十日	同
壹錢（青色）	五年七月二十日	八年二月四日	同
壹錢（薄赭色）	八年二月四日	九五年月十七日	同
壹錢（黑色）	九年五月十七日	十二年十月十一日	同
壹錢（代赭色）	十二年十月十一日	十六年一月一日	同
壹錢（綠色）	十六年一月一日	三十二年四月一日	同

3	貳百文（赤色）	四年三月（朔日）	五年二月（缺日）
8	貳錢（赤色）	五年二月（朔日）	五年七月二十日
	貳錢（赤色）	五年七月二十日	六年六月五日
	貳錢（黃色）	六年六月五日	九年五月十七日
	貳錢（黃綠色）	九年五月十七日	十二年十月十一日
	貳錢（桔梗色）	十二年十月十一日	十六年一月一日
	貳錢（紅色）	十六年一月一日	三十二年一月一日
	參錢（濃橙黃色）	十二年六月三十日	二十一年三月十日（需用少ナキガ爲）
	參錢（鴇色）	二十五年五月六日	三十二年四月一日
13	四錢（淡紅色）	六年四月一日	八年二月四日
	四錢（綠色）	八年二月四日	九年六月二十三日
	四錢（老綠色）	九年六月二十三日	二十一年三月十日
	四錢（赤褐色）	二十一年三月十日	三十二年一月一日
4	五百文（萌黃色）	四年二月（朔日）	五年二月（缺日）
6	五錢（萌黃色）	五年二月（缺日）	六年五月三十一日
21	五錢（萌葱色）	九年三月十九日	九年六月二十三日
	五錢（代赭色）	九年六月二十三日	十六年一月一日

	五錢（藍色）	十六年一月一日	三十二年十月一日
14	六錢（嬌栗色）	七年二月	八年二月四日
	六錢（橙黃色）	八年二月四日	十年六月二十九日
	六錢（橙黃色）	十年六月二十九日	二十一年三月十日（需用少ナキニ依ル）
	六錢（嬌栗色）	四十年八月十日 省令三十二號	大正六年八月卅一日
	八錢（嬌栗色）	十一年十一月二十日	二十一年三月十日
	八錢（桔梗色）	二十一年三月十日	三十二年十月一日
	八錢（茶褐色）	三十二年十月一日	大正六年八月卅一日
	拾錢（綠色）	五年九月（朔日）	八年二月四日
10	拾錢（群青色）	八年二月四日	十年六月二十九日
18	拾錢（青色）	十年六月二十九日	二十一年三月十日
	拾錢（暗橙黃色）	二十一年三月十日	三十二年一月一日
15	拾貳錢（淡紅色）	八年一月一日	十年六月二十九日
22	拾貳錢（桃色）	十年六月二十九日	二十一年三月十日（需用少ナキニ依ル）
16	拾五錢（淡紫色）	八年一月一日	十年六月二十九日
	拾五錢（綠色）	十年六月二十九日	二十一年三月十日

二十二年十一月三十日	同
同	同
同	同
同	同
二十二年十一月三十日	同
二十二年十一月三十日	同
同	同
同	同
二十二年十一月三十日	同
六年五月三十一日	同
二十二年十一月三十日	同
同	同
同	同
二十二年十一月三十日	同
同	同
同	同
大正六年八月三十一日	同
二十二年十一月二十日	同
同	同
二十二年十一月三十日	同
同	同
同	同

拾五錢（紫色）	二十一年三月十日	三十二年十月一日	大正六年八月三十一日
拾五錢（紫色）	三十二年十月一日	大正六年八月卅一日	二十二年十一月三十日
12 貳拾錢（紫色）	五年九月（朔日）	八年二月四日	同
19 貳拾錢（紅色）	八年二月四日	十年八月十八日	同
貳拾錢（濃青色）	十年八月十八日	二十一年三月十日	同
貳拾錢（赤色）	二十一年三月十日	三十二年十月一日	二十二年十一月三十日
貳拾五錢（淡黃色）	二十一年三月十日	八年二月四日	同
11 參拾錢（淡黑色）	五年九月（朔日）	十年八月十八日	同
20 參拾錢（紫色）	八年二月四日	二十一年三月十日（需用少ナキニ依ル）	同
23 參拾錢（紫色）	十年八月十八日	十年八月十八日	同
17 四拾五錢（紅色）	八年一月一日	二十一年三月十日（需用少ナキニ依ル）	二十二年十一月三十日
24 四拾五錢（深紅色）	十年八月十八日	二十一年三月十日	同
五拾錢（深紅色）	十二年六月三十日	大正六年八月卅一日	大正六年八月三十一日
五拾錢（濃茶色）	十二年九月二十七日省令四七號	二十一年三月十日	同
壹圓（濃紅色）	二十一年三月十日	三十二年十月一日	
壹錢五厘（國勢調記念切手）	大正九年九月廿五日		

13 六年四月一日發行

14 七年二月發行

15 八年一月一日發行

16 八年一月一日發行

17 八年一月一日發行

18 八年二月四日發行

19 八年二月四日發行

20 八年二月四日發行

21 九年三月十九日發行

22 十年六月二十九日發行

23 十年八月十八日發行

24 十年八月十八日發行

本圖は郵樂會長永村梅次郎氏の好意によるものなり

本圖は種類會員木村嘉次郎氏の提供によるものである

〔二〕　年　切　の　代　時　當　明

13	14	15
明治四十六年一月一日發行	明治四十七年二月一日發行	明治四十八年一月一日發行
16	17	18
明治四十八年二月一日發行	明治四十八年一月一日發行	明治四十八年二月一日發行
19	20	21
明治四十八年二月一日發行	明治四十八年二月一日發行	明治四十八年三月一日發行
22	23	24
明治四十八年六月一日發行	明治四十八年八月一日發行	明治四十八年八月一日發行

參錢（國勢調査記念切手）	同	同
壹錢五厘、參錢（飛行郵便試行記念）	大正八年十月三日	大正八年十月三十日

備考　切手の金額の上のアラビヤ數字は挿入原色版の印面に對す參照せられたし

日本に於ける記念切手の發行は明治二十七年三月の明治天皇陛下の銀婚式の切手卽ち大婚二十五年祝典記念切手を嚆矢とし、發行度數十三回三十五種にで及で居る。記念切手は祝典事實の性質によりその國內的なるものは內國切手として發行せられ外國郵便に使用し得ざるものあり。その事實が一時的に記念すべきものにして、永久性を有せざるものは豫め有效期間を附して發行される、卽ち飛行郵便試行記念の如き、第一回國勢調査記念切手の如き夫れである、通常切手はその發行に際し期間附きを想像し得ざる處なるも既に五十六種の先例の如く何等かの事情によりて改廢さるゝの運命を荷ふものにして何分其永久性

を保障し得ないのであるが、飜つて記念切手を見れば記念切手なるが故に期間附一時性のものが發生し得ると共に期間を附せざる記念切手の效力は永久にして其の事實と同じく、炳乎として實在を保つのである、本年に於て記念切手の發行を視るべき奉慶事を豫期し得る事は國民一般の觀喜する處である、少しく冗長を顧みず十三回の記念切手を解說して置ふと思ふ、或は執務に際して參考の一端ともなるならんとの僥倖を期待して

記念郵便切手の種類

種類	發行年月日	發行ノ理由及圖形解說
大婚二十五年祝典記念切手 ○貳錢 五錢	明治二十七年三月九日	明治天皇陛下の大婚二十五年を祝する爲に發行す 中央に菊花御紋章を圍繞するに双鶴と梅花唐草を以てし兩陛下の聖壽葉書を壽すの意

明治二十七八年戰役記念切手 ○貳錢 五錢	明治二十九年八月一日	日清戰役を記念し同役に於ける有栖川宮北白川宮兩殿下の御偉勳を不朽に傳へる爲に此の切手を發行す
皇太子殿下御婚儀祝典記念切手 參錢	明治三十三年四月二十八日	三十三年五月十日皇太子殿下（今上陛下）御婚儀の典を奉け玉ふを祝する爲め圖形は中央に鶴形台の內に盛りたる三日夜餅御婚儀の御寢殿に供す御芽出度御儀式の一なり其下方の小筥は御婚儀の御文使の御書を入れたる柳筥なり
日韓通信業務協同記念切手 ○參錢	明治三十八年七月一日	三十八年七月一日を以て日韓通信業務全部合同せしを記念する爲めに圖形中右方に我皇室の御紋章と李花の枝左方李王宮御紋章と梅花の枝を互に之を描き上下に鳩を添綴して平和の內に合同をうつしたる意を偶す
明治三十七八年戰役陸軍凱旋觀兵式記念切手 ○壹錢 五厘 參錢	明治三十九年四月二十九日	三十九年四月三十日全國に於ける陸軍各代表部隊を東京青山練兵場に集め盛大なる凱旋觀兵式を行ひ明治天皇の御親閱あり圖形圓形の上部に近衞の徽章下に此騎砲工の各兵器を描き出征部隊を表す

大禮記念	〇壹錢五厘切手 〇參錢四拾錢	大正四年十一月十日	壹錢五厘、中央に大嘗會に方り祭服着御の析に奉る御幘冠を描き參錢中央に紫宸殿の御儀なる高御座を御帳の色なる紫色を表し周圍に同儀に着御な玉ふ黄櫨染御袍を以て袍の文樣を附す四錢と拾錢共に同圖にして紫宸殿御儀南庭の壯嚴なる御式場を寫す
立太子禮記念	〇壹錢五厘切手 〇參錢拾錢	大正五年十一月三日	皇太子裕仁親王殿下は立儲令により立太子禮の盛典を奉し玉ふ、壹錢五厘參錢同一圖案にして中央窠の内に鴛鴦の雄鳥を描きたるは賢所大前の儀に用ゐ玉ふ闕腋袍の文樣を其儘に附したるなり 拾錢同上の儀に用ゐ玉ふ御冠を臺の上に載せたる樣を描く御冠空頂の黑幘とす
平和記念	壹錢五厘切手 四錢拾錢	大正八年七月一日	四種同一の題材を用ひ希臘神話の因緣する鳩と橄欖の枝とをにてす、方形は結城素明長方形に岡田三郎助氏の描きたるものなり

飛行郵便試行記念	〇壹錢五厘切手 〇參錢	大正八年十月三日	我國の最初試みたる東京大阪間飛行郵便試行を記念す現行切手に飛行樣形を加刷す我邦に於ける添刷切手の始めなり使用期間は大正八年十月三十日限りとす
第一回國勢調査記念	〇壹錢五厘切手 〇參錢	大正九年九月二十五日	大正九年十月一日零時を以つて國勢調査を行ふ記念と宣傳を兼ね圓形は國勢を調査したるは孝德天皇の大化元年國司に詔して后籍を調査せしめたるを初見とするを當時の國司が后籍圍し其の奥書を自署せんとするを狀なり使用期間は大正十年三月三十一日限り
明治神宮鎭座記念	〇壹錢五厘切手 〇參錢	大正九年十一月一日	中央に明治神宮を拜寫す
通信事業創始五十年記念	〇壹錢五厘切手 〇參錢四拾錢	大正十年四月二十日	大正十年四月二十日を以て明治四年三月朔日より新式郵便を施行して滿五十年に相當す依て祝典を擧く 壹錢五厘、四錢方形なるは四隅に最初發行した四十八文、百文、貳百文、五百文の四種の切手を附し中部右方に現代の郵便旗左方に最初の郵便旗を描く參錢、拾錢横方形なる意匠郵便創業の功勞者故前島男爵の銅像と現代遞信省を描く

皇太子殿下御歸朝記念切手 ○壹錢五厘　參錢 四錢　拾錢	大正十年九月三日

〔備考〕　○號を附したるは内國郵便切手にして外國郵便に使用することを保す

皇太子殿下御渡歐御乘艦鹿島供奉艦香取を描く

五　新趣味を奬めて

フイラテリーの主たる外國切手に就きて爰に詳細に論する餘白を持たない、我が遞信局にはスペシメンとして世界各國から來てるものが數万種に及でる目下着々整理に從事してる、之れが完成したなれば好機會を利用して展覽會でも開催して見たい希望を有してる事を申添へたい。

臺灣に於けるフイラテリストとして私の知つてる範圍では研究所の服部武彦

氏臺灣日々新報社主筆谷河梅人氏の如き非常の熱心家で立派な蒐集を持つて居られる、我が遞信部内にては仕事の關係上からも直接間接に切手の因緣を持つてる處から相當に趣味を持つて居らるゝ方もあるから、一つ我々が中心となつてフイラテリーの團體を造り之れが流行の魁をなしたいと思ふ、臺灣の樣に索漠たる生活の處には夫が惡趣味にあらざるかぎり一つでも人間の興味を惹く事を作る事は善い事である、私は此意味に於てフイラテリーを唱道し、其パイプロダクトとして切手貯金の助長に資せんとするものである。

〔大正十二年一月四日〕

世界の山岳切手

一　世界のいろ〳〵

世界に於ける郵便切手の圖案ほど千差萬別のものはない、郵便切手の祖國たる、英國では一八四〇年の所謂ブラック●ペニー以來ビクトリヤ女皇の在世中は女皇を、次でエドワード七世、ヂョーヂ五世と、其君の御世しろしめす限り、日の沒する處なき屬領の隅々までも、其圖形に統一してるから殆ど問題はない。米國はワオシントン●リンカンと英雄崇拜で押し通してる。佛國の「種播き乙女」は ロチーの圖案であつて一九〇三年以來使用されて非常に評判のよいものである、世界到る處に平和の種を播き、全世界を刈り入れる偶意であると云

ふが此頃の佛國の樣にルールを占領し、傍若無人の行動は世界に戰鬪の種播きとしか思はれない。獨逸の「ゲルマニヤ」は軍神で實に愚劣のものである、二十世紀の第一日たる一九〇〇年一月一日から使用されたもので、このゲルマニヤの肖像は最初カイゼル自身の肖像を入れたい希望であつたが、歷代の皇帝に遠慮したとも、臣下の反對に因つたとも云はれて居るが遂に實現しなかつた、皇后自身もモデルになりたかつたが、皇帝の反對で之も沙汰止みとなつて、當時有名であつた若い女優アンナ●ビウリングをモデルとして書いたものである、大戰後列國からかゝる好戰的の圖案は廢止すべく抗議があつて、今では其の姿を隱さなければならない運命になつたのは笑止である。

世界の切手の圖案の中には隨分奇拔なもの、上品なもの、雄大なもの、平凡なもの、種々雜多なものがある、記念切手などになると殊に面白いものがある、

文學藝術に關したものでは墺太利の切手でベートベン●モツアルト●ストラウス●ショパン●シウベルト等の音樂家の肖像を入れたものがあるし、西班牙ではセルバンテスのドンキポーテ物語の中の插圖を入れたものをもある、動物、植物山川風景、肖像、地圖、紋章、實に思ひ〳〵である。今回臺灣に於て發賣する、皇太子殿下行啓記念切手が新高山を描出せるものなるに因みて世界の山岳切手を二三照介解說して見ることゝする。

二　山を表徵したる

私の見たもの氣の附いたものゝ中から二つ三つ次第もなく羅列し、唯だ今回のが記念切手であるが故に同じく、記念切手にして山岳を描けるものを簡單に解說する事とする。

(1) セントルチヤ
下部に The Pintos 3700 feet の文字あり

(2) ボスニヤヘルツエゴビナ
ナレンタ峠の國

(3) ニユウランド
下部の左に MT.Earnslaw の文字あり

(4) エクアドル
Chinborazo の峰の文字あり 20.466呎

(5) ブルガリヤ

(6) ニウジラント

(7) タスマニヤ
Wellington 山の文字あり 4166呎

(8) 勞農露國

(9) ニカラガ

世界の山岳切手

(1)
上部に
The Pinto
8700 feet
の文字あり
チベット

(2)
圖の
キルンベ
峰
ヒマラヤ
東スニナヘラベ

(3)
下部の左に
MT.Kurnalaw
の文字あり
ニュージーランド

(4)
Chimborazo
の峰の文字あり
20,466呎
エクアドル

(5)
ナポリ

(6)
ブルガリア

(7)
Wellington
山の文字あり
14,600呎
タスマニヤ

(8)
[illegible]

(9)
ニカラグア

山岳切手を發行した年代順に從つて記すれは

一八六二年　ニカラガ國　二センタボ　（6）（アラビヤ數字は前圖の印面に對照す）

一八六九年　ニカラカ國　一〇センタボ　二〇センタボ

一八九四年　布哇　二セント

一八九六年　タスマニヤ　半ペンス　一ペンス　（8）

一八九八年　ニウジイランド　二ペンス
　　三ペンス
　　二ペンス
　　二ペンス半（3）
　　五ペンス
　　九ペンス
　　二シルリング

一九〇六年　ボスニヤヘルツエゴビナ　五ヘラー

一九〇八年　エクアドル　一〇ヘラー
一九一四年　瑞西　一スクル（5）
　　三フラン
　　五フラン
　　一〇フラン

スウイスのものにはアルプスが極めて綺麗に描かれて居る蓋し山岳切手中の白眉である。

一九二一年　ザール

五フエニツヒ

一〇ストチンキ

ブルガリヤ

三　山岳物語

記念切手としての山岳切手の二・三を少しばかりお話を致しませふ。

ボリビヤ、一九〇九年六月發行せし五センタボ切手にして、之は一八〇九年六月革命百年祝典記念に發行せしものにして、中央に武具として盾を月桂樹にて圍みたるものにして、其盾に武士の紋どころとして山岳を描けり、山岳としては主題になつて居ないが確に山はある、序にラテンアメリカ史でも書けば面白いけれど今爰に之を書く餘白を持たぬ。

エクアドル、一九〇四年發行にしてアブドン・カルデロン（Captain Abdon Calderon）大尉百年記念切手にして、一は大尉の肖像を入れたものと、他はピチンチャ戰場を現はしたものである、カルデロン大尉は The Hero of the Battle of Pichincha と云はるゝ勳功者であつて、ピチンチャ役は一八二四年五月二十四日の事にして同戰場は海拔一萬二千二百五十尺の高原である、從て山岳切手としては高度と云ひ記念と云ひ、最も適當のものであると云ふ事が出來る。

ニウジーランド、一九〇一年發行にしてニウジーランド軍が南阿戰爭に參加せし記念切手にして、一片半の鳶色の切手で、前景右側に騎兵を描き中央に騎兵隊進出の光景を描き、背景に戰場の山脈を出し、前景左方にも亦一隊の軍隊を出し其足下に「皇帝の命令」と書いてある、左右軍隊の對照せる中央に天使が休戰の喇叭を吹いてる、南阿戰爭の事については爰に述べまい。

(1)セント●ルチア、一九〇二年發行せしものにしてセント●ルチヤ島がコロンブスにより發見せられ以來四百年祝賀記念である、スウフリユエル港の南咽喉を扼する大ピント山小ピント山を描く、大ピントは海拔三千七百尺此島第一の高峰である、セント●ルチヤ島は二三三平方哩の蕞爾たる小島にして人口四萬九千に過ぎざるも奇しき運命を負ふて居る島である、一六〇五年オリバー●ブロスン號乘客七十四名が漂著占領せし處なるが數箇月ならずしてカリブ族の爲めに追はれてしまつた、一六六三年より一八〇三年迄殖民地に於ける英佛戰爭の目的物となつて、一七六三年に於ては一時佛國に讓渡せられた時代はあつたが遂に一八〇三年確實に英國の領土となつたのである。

(2)ボスニヤ●ヘルツエゴビナ、一九一〇年墺國フランツ●ヨセフ一世の八十の賀の祝賀記念切手である、この記念切手は十六枚一組になつて居る、最低一

ヘラーから最高五クローネンまであつて、五クローネンの分に八十の誕辰を遨へたるフランツ●ヨセフ皇帝の肖像を入れてある、其他は此國の山川風景、古蹟、郵便遞送馬車の樣なものが同一の輪廓を用ひて各々收められてある、山岳に關係のあるのは五ヘラーのナレンタ峠の圖と、十ヘラーのバルバス溪谷の通路を繪けるものとである、モ一つ山は背景になつて居るが、二十五ヘラー切手にはボスニヤ●ヘルツエゴビナ二州の首都たるサライエヴオ(Sarajevo)を表はしたるものがある、サライエヴオは歐洲大戰の導火線として人口に膾炙して居る地名で、戰前の狀態に於て人口五萬三千八百七十と五千人の守備隊を有し、州廳と第十五軍團司令部の所在地であつて、ミルヤカ山の溪谷を境界とするの盆地で山間の溪流は合して此町を流れ、町に九つの橋を架けてる、兎に角に閑靜な田舍町としか思へない、吾々は今になつて此切手を見てボスニヤ●ヘルツエゴビ

ナ二州が墺帝フランツ・ヨセフの八十賀辰の記念切手を發行したことゝ、其の一組の中サライエヴオの町のあることに頗る皮肉の興味を惹くものである。アドリア海に面したボスニヤ・ヘルツエゴビナ二州はバルカン諸邦及露國と墺國の係爭目的物であつた、此二州の住民はセルビヤ人にして、塞國は大セルビヤ主義を標榜してオムラヂナ (Omladina)「子供」の意)なる祕密結社を造りセルビヤ人の住する土地を塞國に併合せんとした、露國はバルガン諸スラブ國民の被護者を以て任じて居るのみなずらボ・ヘ二州を領有し南下の要路とせんとしたのであつた、墺國亦海港を得る必要上アドリヤ海に出する途とし此二州を絶對に必要とし、露土戰爭の後のサンステフアノの條約でも、其後の近東問題に決定を與へた伯林條約でも此二州管理する權利を認められたのであつた。一九〇八年土耳古の革命に乘じてブルガリヤは好機逸すべからずとして獨立の宣言を

した、ブルガリヤ公フエジナンドはブルガリヤの皇帝と自稱しツアールの尊稱を冒した程の野心家であつた。このブルガリアと墺國と豫め打ち合せてあつてブルガリア獨立宣言の翌日に墺國はボ・ヘ二州を併合してしまつたのである。ブルガリアは墺國を、墺國は獨逸を後援として腕づくで我意を通そふとした。二州の併合は大セルビヤ主義を信條とする塞國には、多年の希望を水泡に歸せしむるもので實に大打擊であつたが、親分とする露國が、當時日露戰爭後で疲弊して居つて武力干涸などなし得ざるを見越して相手がした仕事だから、塞國としては醫し難い怨を飲むより致し方ないのであつた。這した二州に墺帝の八十賀辰記念切手を發行せしめ、其一枚にはセルビヤの怨恨が爆發したあのサライエヴオがある事は全く不思議なる如くにして何等不思議はないのである。序ながらブルガリヤのツアーと稱したフエルヂナンド公の雄圖も切手を通して

見る事が出來るのである。一九二〇年六月發行した同國の十ストチンキ切手は世界大戰の最中に獨逸に註文したものであつたが、戰爭終了してやつと出來上つて使用した、圖形の中央にブルガリヤの地圖を描き、其の中にフエヂナントの肖像を入れ、大ブルガリヤ主義を如實に表はしたものであつたが、其地圖の中にはルウマニヤに割讓したドブラヂヤと、塞國及び希臘に大戰の結果割讓したマセドニヤをも包含して居つたので、此圖案に對して聯合國側から抗議があつて發行數日ならずして發賣を中止したと云ふ面白い因緣附きのものである。

如此く郵便切手も其國の歷史と關聯して考へて見ると頗る面白いものである、フイラテリーもかくして意義があると思ふのである。

〔大正十二年三月十三日〕

新高山切手の原圖

新高山を思ふ

一

皇儲殿下臺灣行啓を仰せ出さる、誠に之れ聖代の盛事にして四百萬の蒼生、皇恩の海嶽なるに感泣し、之を外に顯はしては赤誠以て鳳駕を拜迎し、之を內に省みて微力を盡瘁して、拓殖富强の實を致さんと期するこそ、洵に之れ臣民奉公するの所以ならずんばあらず。

斯の盛事を永久に記憶し、久遠の記念たらしむる爲めに、記念郵便切手發行の擧ありと聞く、吾人の欣幸之に過ぎざるなり。切手は之を渉たりと雖も、最小形に於て國權を表現するのみならず、最も國民普遍的のものなれば國家的記

念の對象として爾く好適品は之あらざるなり。明治二十七年大婚二十五年記念を嚆矢として記念切手の發行せられたるもの既に十三回、畏くも皇太子殿下の御祝賀に關するもの二あり、立太子禮及御歸朝記念之なり、共に之れ全國的奉慶事にして、未だ以て地方行啓に之れありしを聞かず。然共臺灣行啓たるや目的地よりすれば限地的なりと雖も、之が殖民地行啓てふ意味より見れば決して地域的に非ずして實に國家的奉慶事たらざるべからざる事は、少しく臺灣の明治史に於ける地位、明治大帝の御鴻業を拜察する時に、何人も首肯する處なるを信ず。

今回臺灣行啓記念切手に新高山を主題として描出せし事は洵に有意義なる事にして、新高山は臺灣其者の表徴たり記號たるのみならず、新高なる山名は畏くも明治大帝の下し賜りたるものなる事を想起するに於て此切手に之が撰ばれ

たる事に深甚なる意義を發見せんとするものなり、自からを量らず此機會に於て聊か斯の靈峯につき記すあらんとす。

新高山は支那に於ては「玉山」と稱し、生蕃人は八通關山と稱すと云ふ、文字に表れたるは最初は、康熙年間の中葉にして郁永河の「番境補遺」に玉山を記して

玉山、在萬山中、其山獨高、無遠不見、巉巖峭削、白色如銀、遠望如大白積雪。四面攢峰環繞、可望不可即、皆言此山渾然美玉、每晴霽在郡城（臺南）不啻天上白雲也

臺灣に於ける清朝の官人にして玉山を題として賦詩せるもの少なからざるが如し、外國人の間には Mount Morrison として知らる、千八百六十年代高雄、淡水間を航行交易せし Captain William Morrison の名より來れるが如し、彼船長として數次西海岸を航行し遠く之を望見し、臺灣最高の山岳として自己の名

を冠して報告せるに基因せりといふ。

二

明治三十年六月二十八日畏くも明治天皇陛下斯山に新高の名を賜り、其の由を同年七月六日拓殖務省告示第六號を以て一般に告示せらる、爾來星霜二十五年を經過し、當時の白雪は四半世紀後の今日に變らずと雖も、人老ひ易く、人新しくして多く往時を記するなし、幸ひに參謀本部に於て修史し、藤井包聰をして錄せしむるものあり、文に曰く

巍々として峻高なるものは山なり。鞏固にして動かさるものも亦山なり。故に古より君父の恩德を表し、國家の安寧を頌する常に譬を富士岳に取る。臺灣島の我に歸するや、亦之と伯仲する高山を得たり「モリソン」山卽ち是な

り。此名は歐洲人の稱する處と云ふ。其七月參謀本部より測量部員を此島に派し、全島の測量に著手するや。參謀總長殿下大本營の御前會議に於て其事を奏上せられ、議此山の名に及びし時に、陛下測量完成の日に至らば朕更らに之に命名せんと勅し給ひしといふ、其後測量部は尙部員數班を增發し、土匪、生蕃、起伏、叛亂の間を崎嶇間關して爲し得る限りを測量し、其區域往々政化の未だ達せざるに及び、昨年九月竣功し、爾來製圖に勉め、本年六月將に之を印刷せんとするに臨み　殿下は副官將校をして京都に至り奏上する處あらしめしに、同下旬參謀本部次長川上閣下の西上して天機を伺はるゝに及び、恭しくも新高山の嘉名を賜へり、卽ち之を地圖上に銘刻し以て萬古不易の名と爲したるが如し。子の始めて生るるや、父之を命名す　今陛下の此島中の第一の高山に命名し給へる、卽ち亦以て國民新邦を子愛し給ふの聖德

を仰ぎ奉るべし、嗚呼我大八州　今上陛下の御代に於て更らに此大島を加へ
皇德の益々高きこと此山の高きより高く、國家の益々鞏固なる事此山の動か
ざる鞏固なり、畏くも　陛下の宸慮を臺灣島に注ぎ給ふ事前述の如し、臣民
たるもの豈益々其經營に鞠躬して皇威を宣揚し奉らざるべけんや。
此修史の文は史官之を錄せりと雖も其意の存する處は親しく　陛下より聖旨
を拜承せる時の參謀總長有栖川熾仁親王殿下及川上次長の口授加筆せられたる
ものなる事、推するに難からず、此一編の文章の中に明治大帝の殖民政策に關
する大御心を拜承するを得べく、國民新邦を子愛し給ふ御聖德につき、我等只
管感泣措く能はざるものなり。されば　明治天皇陛下に於せられて折にふれて
臺灣をよみませる御歌に新高山を思ひ給へるもの數あり。
明治三十四年の秋に月前遠情をよませ給へる

はれわたる空にむかひて思ふかな
新高山の月はいかにと

＊　＊　＊　＊　＊

同四十二年をりにふれてよみませる中に
新高の山のふもとの民草も
茂りまさるときくぞ嬉しき

＊　＊　＊　＊　＊

同四十三年をりにふれてよませ給へる御製の中に
新高の山よりおくにいつの日か
うつしうゝべきわがをしへぐさ

かく常に大御心を掛け給ひける　明治大帝も高砂島に御幸きましますに折もなく、今上陛下にも既に仰せ出さるやに承り居たるも、政務御多端にて遂に鳳駕を向けさせ給ふ事なかりしに、今爰に日の御子の出ませるを迎へ奉る我等民草のさきはひは云はずもがな、其名を賜りたる新高山若し靈あらば汝の山高きにもまして、聖壽長久をことほげよかし。

三

新高は其位置たるや北緯二十三度二十五分、東經百二十一度八分にあり、嘉義新高の稱ある新高主山、東山たる斗六新高、臺東新高の稱ある新高東山の三峯よりなる、領臺以來二十有年此の靈域に足跡を印したるの士も亦僅指に耐へず、最初の登山者は明治二十九年九月長野義虎氏にして、次で同年十月本多靜

六氏齋藤音作氏あり、三十一年十二月獨乙人ステーペル氏、三十二年十二月齋藤讓氏ありと雖も後人の之を調査せる所によれば、此等は皆最高峰に登攀せしにあらずして、臺東新高の稱ある東山なるが如し、最高峰新高主山の登攀の第一は實に明治三十三年四月十三日鳥居龍藏氏の一行なりとす、從來新高最高々度として世に發表せられたるものを掲記すれば

1	一萬四千尺餘	四十万分一臺灣島測察地圖
2	一萬四千尺	理學士石井八萬次郎氏
3	一萬三千七百尺	農學士齋藤音作氏
4	一萬三千二百尺以上	日本地質圖說明書
5	一萬二千九百尺餘	理學士齋藤讓氏
6	一萬二千八百五十尺	水路部日本水路誌

7 一萬二千八百五十尺　獨逸人ステーベル氏
8 一萬二千六百尺　鳥居龍藏氏
9 一萬三千二百尺（四〇〇〇米）　土地調査局技手高木喜與四氏
10 一萬三千〇十八尺（三九四五米）　寺本貞吉氏
11 一萬三千百四尺（三九一七米）　野呂寧氏
12 一萬三千〇七十五尺（三九六二米）　一戸直藏氏
13. 一萬三千百三十四尺（三九八〇米）

如此く列記したるものありと雖も（一）乃至（八）は最高峯にあらずして新高三峯の中にて最も低き東山なれば之を最高度として採用すべからず、（九）以下は主山を測定せるものなれども其方法として（一）アネロイド晴雨計によるもの（二）水銀晴雨計によるもの（三）アリデーを用ひて爲せる三角測量の結果によるもの

の三種あり、第一種は大體の見當を得るに止まり、高さの測量として不完全なるを免れず、水銀晴雨計により氣壓の差に基き氣溫、水蒸氣張力等の修正を施して測定し、其技巧精密熟練なるに於ては比較的確實近似數を得るに難からずとす、然共理論上三角測量によるも最も正確なるは勿論なりとするも觀測器械の精粗、技術の巧拙により著しき差の生ずるものなるを免れず、野呂氏の明治四十一年十二月になしたるものは三角測量にして、三十七年の高木氏の調査を基礎として一層精密に實行せるものなれば、現在に於ては野呂氏の調査を以て最も確實なるものとせざるべからず、陸地測量部の測定は既に殆んど完成し最近に於て發表せらるべしと聞く、之によりて斷定的に日本最高峰の高度確定する事となるなり　明治大帝の名を賜ひたる新高山、今や日の御子の御幸を忝ふして彌榮にその譽を高ふすること目出度けれ。

〔大正十二年三月十日〕

霧社と水社へ

一

人のするてふホネムン●トリップも、宮仕へする身には折を得難ふして、人生唯一の契機に於て運命の神の後頭を握つた私は、今爰に失はれた羊を取り返した牧者の思を禁する得ざるものがある。そは此旅行が我が友M氏婚姻の宴に列して其席より第一歩が創められしを以て、自からの新婚の日を追想して若々しい血を甦らせんとするものがあるからである。

新郎M氏は現に×××教官として嘖々の名聲あり、私とは高等學校の時代を同ふしての知己であるのみならず、花嫁は私の所のと臺北女學校の同級で最も

親しい仲間であつたから、以前から美しき令嬢の一人として私も知て居つた、男は男同士で、女は女同士で知合であつたものが、一組づゝとしての生活交渉を開始する事が出來ると云ふ現象は、既に臺灣に於ける内地人の生活が、何等缺くる處なきを證すると共に、他面に於て臺灣に於ける生活範圍なるものが、頗る擁屏せられたるもので、都會生活の夫れの如く荒野を歩むものにあらずして、機微相通じ、隣保相助くる脈胳一縷、打たば響くが如き最も完全なる有機體的生活を營むものなりとの、觀察の材料の一端ともなるものにして、殖民政策上から考へて非常に面白い現象なりと信ずる。

二

そは夜行の汽車に寢られぬまゝに、人の樂しき夢を嚙み絞めて思ひ續けしこ

とども。二時半臺中に著き倶樂部は滿員で人の寢床に割り込みて、暫の假睡を貪る、六時半帝國製糖の輕鐵により南投に向ふ、途中阿罩霧を過ぎ問題の人林獻堂一族の居宅を遠く望み見て多少の感愴あり。沿線風物多く異ならずと雖も、耕して山頂に至りて芭蕉を植ふ、遠く望めば蕉葉は雜草としては大きく、樹木としては小さく、宛も箱庭に植たる草の如く、頗る釣合ひの取れざるものにして、美觀を削ぐ事少しとせず。八時半過ぎ南投に著く、此所にてT技師、S事務官と一所になり明治製糖線により名間に向ふ、T氏は監督課長として臺灣電力會社の二水門牌間の新線及名間埔里社間の輕鐵視察の任を帶び、S氏は電力會社線開通の曉、輸送計劃上の基礎的調査の任務を帶びられ、私は豫て見やうと思てた電力會社が沿線山林より楠仔枕木購入の狀態を調査し、併せて未知地を視察して智見を廣めむ爲に好機を握つて、行を共にする所以である。兎

に角に日月潭は當代の題目(トピック)にして、苟も日月潭を見ざれば人にあらずの慨がある、此意味に於ても此行は全く無益にあらず、聊か以て自己の同行の辨をなすと云爾。

三

頃者、大每紙の高木氏「臺灣印象記」を載せて、劈頭に臺車の發達を說き、臺灣最大至便の交通機關にして、以て山間の僻邑に行すべく、蕃界の蕃社をも見舞ふを得べしと云ふ、我等鐵道者(レイルウエイヤン)には側痒の感無き能はずと雖も、有繫に觀察正鵠を得たるの至言と云はざるべからず、名間より埔里社に至る軌道は臺灣製糖の經營する處にして、施設最も完備し延長三十三哩七分、臺東の官設軌道を除きては最長なるを以て、臺灣の所謂最長最便の交通機關中の代表的のもの

なれば聊か見聞せし處を記さんとす。その起伏重疊、勾配の急なるは、名間は海拔三百餘尺なるに最高地點魚池にては二千二百三十五尺にして、更に六百尺を降りて埔里社に達するによりても知るべく、多く十六封度レールを使用す勾配急なる所には上下線を異にするなど危險の防止、苦心の跡を見るべく、二十鎖毎にコンクリート製のマイルポストを建つ、兩終端及集集、新年庄、槌仔寮、魚池に停車場を設け驛長を置き、各驛間に電話を通じ連絡を保ち、一定のダイヤグラムの下に臺車の運轉を行ふ、使用臺車約四百臺、他に原料採收線用のもの五百餘臺あり、大體に於て旅客臺車と貨物臺車とは系統を異にし、貨物は黃牛之を索く、一車につきて牛と牛飼と、降り勾配に際して牛を放ちて自行し、牛を次の所要地迄追て行く囝仔とを要す、故に貨物臺車を索かんとする者は必ず黃牛を有せざるべからず、牛一頭平均百五十圓に値す、苦力之が購入の資

力なきを以て會社より一人につき購入資金として百圓を貸附け年賦償還の方法を取り、勞働出役の義務を强制す、昨年度に於て之れが爲めに四萬圓を支出せりと云ふ仲々面白い鎗形なり、貨物臺車一往復に四日間を要し得る所は十三四圓なれども牛、牛飼及囝仔の三生物の口を糊し寢を取るの料を差引けば實收三四圓を出でずと云ふ、客臺車は二人押二人乘一哩十五錢六厘なれば片道五圓廿五錢の賃銀收入あれば會社は相當の苦力賃を蚓すべし、運轉方法として貨物臺車は十臺乃至數十臺を連ねて運行し、時を定めて停車場側線又は復線に行き合をなして待避し、其間を適宜に客臺車の運行をなすものなれば、途中にて多くペンコするを要せざるが如し、ペンコの點は此行は監督課長の御巡視なれば豫め警曞の聲の行き届きたる爲にもよるべければ十分の保障をなし難しとす。此軌道は埔里社工場の製品を搬出するを主たる目的とせるものなるが、之あるが

爲めにあの山の中に比較的早くより、人跡至り智能を傾注して、遂に水力電氣事業の計劃するに至りたるものなれば此軌道は水電事業の直接間接の誘因にして、門牌の大發電機械運搬の爲には現に鐵道布設中なりと雖も、北山坑の豫備發電所のモーター或はタービンの如きものは此軌道あるが爲めと輸送するを得るものにして、此軌道は卽ち日月潭大水電事業の先驅者なりと云ふも過言にあらずと信ずものなり。

四

道は濁水溪右岸を沿て躋る、劈開性に富む粘盤岩質の斷崖絕壁を片切取にて進む所は卽ち軌道にして、或は崩壞して陷沒せるを奇橋を以て縫ふあり、或は河磧を涉するあり、車上より瞰觀すれば濁水滔々として足下を洗い、眞に消魂失膽事に屬す、軌道に殆ど併行して電力會社の鐵道を敷設す、二水、名間間は

既に引き延ばしを了へ、名間水裡坑間も工事頗る進捗せるを見る、前年來工事の困難と瘴癘の害の爲め遲延澁滯を風聞せしに其意外の進行に驚くものあり。切取、隧道、護岸土、留等の施行の難を蔑し、マラリヤと鬪ひ、隧道の如きハッパを掛ると之か粘盤岩に作用し、工夫の齒根を侵し、水銀中毒乃至壞血病の如き病狀を呈せりと、粘盤岩質は風化して濁水の素となり風致を毀損し、氣化して人體を茶毒す云ふべきが、此工事を董督する高山節繁氏、箕輛氏同行して說明の勞をとらる。

水裡坑にて中食を執り、新年庄、槌仔寮を經て魚池に至りしに既に薄暮なり、之より埔里社迄八哩九分にして、雨溪に沿て六百尺を降下すべし。兩岸の奇巖絕壁、幽谷に淸水滄々として流るゝ處を鐵線橋、隧道を以て進む、此間の山姿水樣は誠に賞すべく埔里社耶馬溪の銘あり。既にして下り勾配急にしてT技

師の測定によれば一時間十五哩の速力を出せりと云ふ、臺車の十五哩は汽車の夫と異り人に速力の感覺鋭敏にして奇勝も絶景も雲烟過眼も啻ならず、加ふるに漸く黎闇を増し漆黑の中を邁進す、臺糖社の經營なればこそ保線も行き届きたれば安座して臺車に生を託し得べしと雖も何人か萬全を保し得べき、張目專念總身に冷汗を流す一再ならず、豈に尻の痛いどころにあらざるなり、埔里社に漸く近ふして燈火一、三、五點、大洋に漁火の明滅するに似たり、之を望んで卒然として全身の弛緩を覺ゆ、車を下りて八時過ぎ日月館に著す、一日の行程容易の業にあらざるなり、詩人曰はずや。

臺車音轆轆々々、　行先何處哉、
埔里社有南投廳、　道山又崖下、
三十四哩痛尻裏、　人云難堪兮、

五

埔里社は通常ポリ社と稱す、言源は知らざれども昔の蕃界、今の市街にして當初警察官多く駐在して理蕃の策源地なりしを以てポリ社と云ふなりと呵々、今は能高郡役所の所在地、郡守齋藤透氏は先に臺東廳、南投廳警務課長として蕃通として令名あり、練達明直の士なり、昨年サラマオ蕃の出草反抗の擧ありしも幾莫もなくして平穩に歸したるは州廳の方針宜しきを得たるものにもよるが君の手腕によるもの多かりしを信ずるものなり、今やシャカロー反して友蕃の誘拐至らざるなきも、君此所に鎮護となりて萬鈞の重きをなすものありと云ふべし。

埔里社に臺灣製糖會社のある事は吾人の驚異に値するものなり、能力として

は六百噸年產額十萬擔を出でさるものなるも此山間僻地に工場を設けたるの事業家の果斷に服するものなり、

多からざる平地は運賃の關係上米作するを利とせば水稻を植て餘剩なく、甘蔗は山腹の傾斜面に植すと云ふ、只だ此地は山間の盆地なれば無風地帶にして西海岸の主產地の暴風の慘害を被る時も其の憂なきと蔗苗地として好適なるの利益あり、吾人は此工場の特異なる地位につき自己の了解を得る程度に研究せん事を欲するものなるが時日の許さゞると、商業道德に關するを以て之をせざるべく、兎に角埔里社製糖會社創立以來の玄勳野瀨氏は吾人の疑問に對して「少しく大膽なりし」と答へられたり。水電工事以來頓に活氣を呈し、料亭數軒想思園、花月を最とす、旅館は埔里館日月館あり、我等の泊したるは日月館の所謂總督室にして楣間に硯海總督の「相見萬古知己」の扁額を揚ぐ楠板の格天井

にして剝がして持てけばデーブルが澤山出來るなど平民らしい事を考ふ、誠に地に過ぎたる建物なり、討伐當時總督の來社の爲めに特に建たるものなりと云ふ、豈茶代を奮發せざるべけんや、書畫翰墨帖を出す名士、知友、同輩の筆蹟雄勁躍動す、吾人と雖も遲疑すべくもあらず、敗けぬ氣になり惡筆を揮て日月潭所感と題して「水力、實力、馬力、腕力、金力」と力づくし見たいなものを書く。

六

朝霧が深く立ち罩めてる、內地鳥が飛で居る、朝はビリッと寒い、國の田舍へ歸つた樣な氣がする、臺車は眉溪に沿て昇る十一哩、更らに徒步する一里半、途中の奇嶺絕勝は東洋第一の稱ある花蓮港の內タロコへ入るタッキリの溪谷に

は及ばずと雖も、到底内地に於ては見るべからざるものである、道は昇りに登ると雖も保守行き届きたれば靴を以て歩むに難からず、昔は鐵線橋に膽を消したるも今は新道によりて之を要せず、一度眉溪を渡るに木造の Fink Truss の形式を用ひしものあり、蕃界にも仲々の技術者が居るとT技師の嘆稱する所なり、途中飛瀑懸れり、觀音の瀧と云ふ、瀧と觀音は壺坂以來附き物なり、「人留の關」の險は一夫關に當るや開く莫し、矧んや蕃夫の之を守りし昔を想起するに於ておや。

眉溪の上流の極まる所に、三千五百尺の山上に鷹の巣籠の如き村あり、之れ霧社なり、仰げば一萬尺の高峰、能高、荅萊主は指呼の間に依稀たり、足下に濁水の水源流れて碧帶を繞らせるが如し、海拔に從て氣温低く屋外に於て左表の如し。

	午前二時	午前六時	午後二時	午後六時
大正十年一月一日	五九度	五九	六一	六三
二月一日	五二	四九	六五	六〇
三月八日	五二	五六	八一	六六

有名なる霧社櫻も赤きものは二月頃より咲き初め猶ほ花をつくるものあれども、多くは葉櫻となれり、今は彼岸櫻に似たるもの盛りなり、折から陸軍記念日に當りければ腰折一首

ますらをが立てし勳のかざしなれ
今をさかりの霧社さくらはな

警務課分室に敬意を表し、主任長崎警部より横斷道路及宜蘭に出るピャナン越の開鑿の狀況を聞く、蕃童學校は休日なれば訪づれて授業を觀るに由なく、

校長の語る所によれば在學生百四十人、四學級あり、蕃童は唱歌を最も得意とし算術に拙劣なりと、蕃產物交換所に至り珍品鹿鞭の累々たるを見る、觀たばかりにても大分に效力ありたるが如し。霧ケ岡倶樂部に中食を喫す、給仕の蕃婦のお酌で麥酒の滿を引く、此蕃婦言語は本より坐作進退頗る禮に適ふ、甚だ羞耻の色あり、年は知らずと云ふ、兎に角妙齡、沈花羞月、立てば海棠でもないが、惜哉黠はあるが仲々の美人、蕃社に歸るを厭ふと云ふ、一行のO君この内で一番お前の好きなのを婿にしないかと唆喩すれば、貴君でもよいとやられてギャフンたり、理蕃綏撫政策も此處迄來ねば嘘なり、此邊の蕃人はタイヤル種族に屬す、霧社分室の監視に屬するにシカヤウ、サラマオ、マレッバ、バク、トロコ、タリック、霧社蕃、萬大社あり、此の各蕃社内に各々三、四乃至十數の社を分ちて散居す、其の最大蕃社たる霧社蕃を見るに

蕃社名	戸數	男	女	配偶數
ボアルン	三四	六五	七六	三一
プカサン	一二	三六	二四	一二
スーク	五〇	九六	九五	四四
マヘボ	五一	九六	九九	四六
カロワン	九	一四	一九	九
カツツク	三二	四六	五八	二三
ホーコー	六一	一二一	一一九	四九
ロゴドク	四九	一〇九	一〇一	四〇
シーバウ	八	一三	一四	六
タカナン	二二	四二	三五	一七
トオガン	三四	五九	七八	三九

此小表によりても蕃社の人的組成及生活狀態を推するに足るものあり、男よりも女の超過せる社などは、過去に於ける討伐に對する頑强、或は時々の反抗を物語るものゝ如し、其内の最大部落たるパーランは霧社の在る所にして吾等の親しく見しところる最も溫順にして、倶樂部の別嬪も此所の出身なり、屋外竿頭に麻の束ねたる吹き流しの如きものあり、反抗蕃に出征して獲首せしを頌するものなりと二時過ぎ山を辭し一路臺車を飛ばして埔里社に歸りて浴す。

七

早起埔里社を發す、埔起七哩四十六鎖より分岐して司馬按に至る、電力會社の建設部あり、大工事の策源地なり、技師長堀見末子氏より二萬分地圖により

計劃の大樣につき說明を聞く、濁水溪の水を姉妹が原に取り入れ、隧道及其間多少の開渠によりて日月潭に入る、現在の流出口なる水社及頭社に堰堤を設けて現在水面より七十五尺を高め海拔二千四百七十五尺とし日月潭を貯水池とするものにして、其水槽（Forebay）容量五十七億立方尺、更に水壓隧道にて導き門牌にて落下せしむ。

流量每秒九百箇、千百尺乃至千四百尺の落差を以てすれば理論馬力十四萬を出すべしと、誠に東洋第一發電所なり、水壓鐵管は直徑六十吋乃至四十吋にて厚さ吋二分のものを用ゆ、隧道の總延長五里六丁にして六號隧道最長にして千七百八十間七號千七百間、之と九號の三隧道にはロックドリルを使用すと、五里餘の流水路には每秒三百箇乃至千八百箇の水量を通じ、其間に濁水は沈澱して淸水となり大貯水池日月潭に入る、計算上千分の一の土砂を含有して流入す

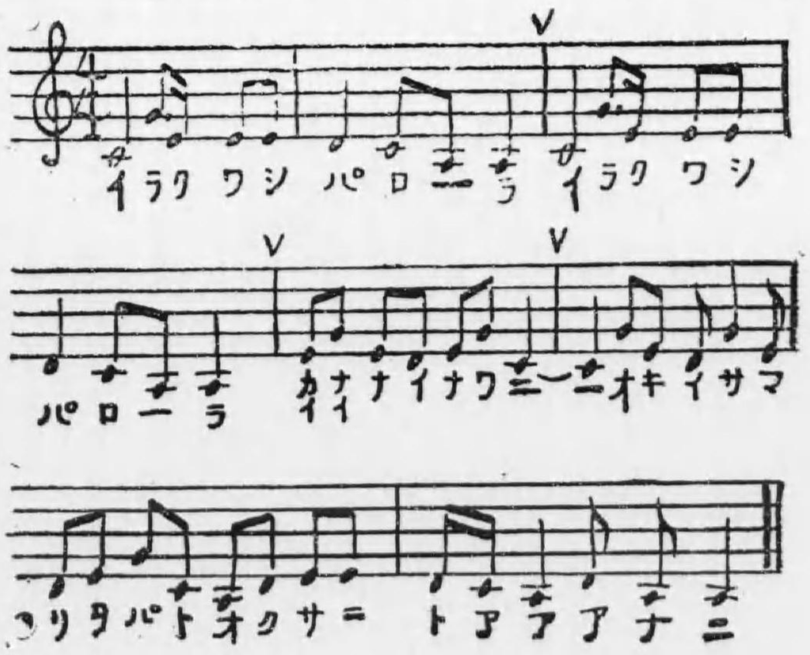
ると假定するも現在の水深十八尺を埋むるには五六十年を要し、且つ實際利用する水は現水面以上の七十五尺なれば貯水池を浚渫するは何の時か想像するに難きものなりとす、今や工事用として眉溪其他山間の潤水を利用して北山坑に二千四百馬力の發電所を設け、工事成り機械のセッチングに忙し、軈て材料運搬もズリ出しも凡て電車を用ふべく工事に全能力を出すべし。技術家は時に途方もない大きなプランを建てるものなるが如此きものをなすには、頭と腹と手腕と脚力とを要するものにして、祿々たる平凡工事とは比すべくもなく、又之を成し遂ると云ふ事は人間の生活經驗としても得るところ僅少にあらざるべし。

八

司馬按より二十町を昇れば日月潭なり、湖沼學上の研究は知らずと雖も山間

陷沒地に瀕水したるものゝ如し、日潭は周圍二里十八町、月潭一里二十二町、水面積六百甲歩工事後にては八百甲に增す、山姿水樣は中禪寺湖を思はしむ、內地には珍らしからねど久しく此如き風光に飢へし者には清明暢達の氣容を湧起すものあり、扁舟にて湖を横切り冷酒を擧げて陶然たり、湖中に大四手網を備へたる竹筏生活の奇なる、此竹筏は彼等の資本にして同時に住宅なり、猫額の竹床上、豚を飼ひ、野菜を植ゆ、黃叔敬の「蕃俗六考」には之を浮田と謂ふ。蕃人の用ふる楠の獨木舟の水を行くの早き。丸木舟はロビンソンクルソー以來の御馴みなるも本物を見たのは之が初めてなり、劉韻珂の「奏勘蕃疏」にも矢張り珍しかつたと見へて這な事が書てある、大木を以て、分ちて兩開と爲し、其中を刳きて、毫も增益する無し、呼て「蟒甲」となす、船は木質堅く鋏石の如く長きもの二丈有奇、短きも亦丈餘或は八九尺、濶さ三四尺に等しからず」と蟒甲

即ち「ヴアンカア」と謂ふのはペイボ族一群の船と云ふ言葉であつて、水沙連蕃、即ち水社蕃にては舟はルゾ（Ruzo）櫂をパッタン（Pattan）と謂ふのである、湖畔に水社蕃即ち石印蕃社を訪ふ、これ化蕃と稱するものにして生蕃と熟蕃との間に屬するものなり、移住民族にして其傳説頗る神秘的なり、今より二百四十年前嘉義廳下の猪母蚋社蕃丁二十四人八通關に出獵し白鹿を狩り出し、其足跡を追て此所に住せりと云ふ、現在戸數二十七戸、男七十二名、女六十八名なり、彼等は音樂的才能と歌謠によりて有名にして又た人に愛好せらる、先づ乞ふて化蕃の歌を謠はしむ、イ● ラクワシパローラ● イ● ラクワシパローラ● カイナイナイ● ナイワニー● オキイサ● マリタパト● クサニトア● アナニー我が友よ船を漕ぎ來遊せよとの意なりと、之を囘唱せしむる數十度にして耳漸く熟し家苞とするを得たるが如し、石印蕃社の名の因で來る所は庭上の扁石を杵



日月潭とその歌謠

を以て春きて樂をなすに依る、余之れを「キネホン」と稱せんと欲す、杵は大小長短數本皆な五六尺、十尺に達するものあり、細く短きものは音高く、太く長きものは低し、仲々に我等の纖手にては操り難し、樂は二分拍子にて一定の旋律をなせり、搗擣の初めに當つて指導者ありて田舍の錢入の如き形をしたる竹筒に水を入れたるものを持つて石面を敲く、其音低調にして、先ず指導旋律を奏し次で杵音に和す、擣音清澄高雅、湖面に餘韻を送る、月明に刳舟を浮べて聞けば宛ながらに遊子の心腸を傷ましむるものあるべし、然りと雖も決して哀音に非ず、由來打樂器の性質として興奮樂天的のものなるが、唯その木製樂器なるを以て甚しからざるあるのみ。余の所謂「キネホン」の起源は粟を春く風習より出たるは明なるも、現在は樂器として獨立の發達をなし、打殼に不必要なる長大なるものを作成せるに至れり、打殼の風俗は何れの蕃社にも存し、又音

樂を愛好するは蕃人の通有性なるも、此所に特異の進歩を生みたる原因は一に湖上の反響なる事實に俟ざるべからず、日月潭は共鳴箱（レゾナンスボックス）の作用をなしたればこそ蕃人に音樂美を認識せしむるに至らしめたるなり、其音色ビヤノに類す或はビヤノの前身クラビヤコール・ハプシコートに類せずやと思ふ、如此き原始的の樂器は世界に其例を見ず、打樂器と云ふと雖も石面の振動を想像することは難ければ之れ一種の打弦樂器にして杵其物が弦の作用をなすものと見るべく、さすれば其音色のビヤノに類するは樂器分類上より見ても當然なりとす、吾人は考古學的趣味と音學史及理論の研究に興味を持つの人に杵の製法及旋律奏法の研究と保存とを提撕するものにして、進で杵の振動率の研究の如きものを發表せば世界的興味と賞讃を博すべきを信じて疑はず、石印蕃社も軈ては水底に沈む運命を有するものなればキネホンの將來も亦知るべからず、彼等の移殖

安住につき深甚の注意を拂はれん事を電力會社長に希望して已まざると共に、今の時に於て音樂家を特派して之が調査保存の法を講ぜられん事を趣味該博なる海南長官に建言せんとするものなり。

杵音に送られ蕃社を辞し扁舟に乘じて湖を横ぎる、舟人も亦水社蕃人なり、更らに彼をしてラクワシバを復唱せしめ忘却せざらむ事を努む、水社に舟を捨て涵碧樓に憩ふ、之より下る一里半、次で直下七百尺にして茅埔に至る、軀を臺車に載して無礙に降る、奔走は駟も亦及ぶべからず。

〔大正十年三月二十日臺灣鐵道〕

八仙山へ

檜枕木を四万挺を頼である八仙山へ、八千尺の八仙山へ、師走にして躋るとは實に高砂島なりけり。

一

十二月六日、一レ(一列車)にて葫蘆墩に著きしは午後一時半、之より臺車の客となる、土牛貯木場迄五十錢なり、軈て臺車の仕度も出來たればとて、見れば例の一等臺車てふ籐椅子製のもの、誰もソンなものを註文しないのにと思ふたが成程リヤンコ(二個卸)になるとこれに乘せられるものなるべし、一種のルク

スス●ストイエルと覺悟す。兎に角一等臺車なるものは對人關係に於ては face to face で如何なる場合に於ても相手方をしてペンコ(轉)せしめ、或は之を追い越し得る權利を主張し得るので、如此く明確に適切に、イエリングの所謂「權利の爲めの爭鬪」を實行するものはない、然し其實行の結果に於て痛快なるだけそれだけユマニチーの立場から見て寒心すべきものがなからうか、勝者として優越感を嗜む一方に、相手方に忍從屈辱觀を抱かせない事は稀にはあらざるべく、近代的傾向の爰に胚胎する事は、社會政策學者の研究を俟ずして知る事が出來る、更に殖民政策から見て、優等車に乘るべく豫想される者が反對の場合に置かれた時に、此小さな箇々の場合に於て甚だ好ましからざる結果を構成するものではなからうか。同化と云ふ事は單なる政策や力の問題でない心の問題である、箇々の場合に於て損はれた心を取り返す事である、苟も之に反す

るが如き事は如何なる些事と雖も之を改むるに嘗なるべからず、余をして當路者たらしむればなどゝ空想にふける、車は走る景は移り境は轉ず、此邊一帶コロトン米の本場とて水田良く拓け、地價も甲當り五千圓以上なりと云ふ、時は農閑の季節なるも廣東人種婦人の田園に耕する頗る勤勉なるを見る、老いたるの黑布を頭に纏ひたるは天主教のノンネンの如く、若きは多く豐頰頗る愛すべきを知る、此地方臺灣美人系として頗る名ありと云ふ。

路傍の土人茶店の赤紙の簾に「政府諭人遷、民家從命換」と書けるを見る、此家は恐らく公用徵收か何かで立退きを命ぜられて此所に茶店を開くに至れるならむ、行く程に石崗公學校の生垣の蔦かづら眞紅に燃えて頗る美なり、杜樊川にあらざるも「臺車を留て漫ろに愛す、楓葉は二月の花よりも紅なり」の興趣あり。

貯木池は土牛より一哩迂回せる地點にあり、貯水池面積九百二十餘坪にして敢て大なりと云ふべからず、貯水池と云はうより單に川狩りせし木材の取入れ口にして水揚後直ちに極積(ハエヅミ)をなすものなり、新設の事務所及官舍は檜の香高く住み良からむと思ふ、貯木場より葫蘆墩に輕鐵により搬出するものにして八仙山材は二間ものと稱する十四尺もの以上を出さるゝものなれば、臺車二臺連結せば敢て不便にあらざるが如し、然れ共未だ積込につき何等の設備を設けざれば之に頗る困難するものゝ如し、少くともボルテブルウインチ乃至レベルホームの設け無からざるべからずと信ず、此輕鐵運賃は尺締一哩一錢九厘にして營林局は特約を以て之れの四割引とす、此率により我が枕木一挺當り土牛葫蘆墩間七錢餘を要する事となる、決して些少なりと云ふべからず、余を以て之を見れば土牛貯木場は葫蘆墩輕鐵に對しては最大の顧客ならむも、假に經費の點を

論ぜず搬出の不便なる點より見ても臺車其者が嵩大物を搬出するに困難なるは明かにして、敢て土牛は大甲溪の河口にあらず、久良栖より九里の川流をなすに何ぞ葫蘆墩に延長し此所に貯木場を設けざりしや、或は云はん土牛取入口の八寶圳は水量多し、土牛以下は頓に水量を減ずればなりと、土牛以後に唯一の葫蘆墩圳あるのみ水量の少き時は河勢の整理をなせば足る、然して木材の管流（クダナガシ）（筏に組で流すものに對して丸太一本宛流すものを云ふ）は多く農閑の減水期に於てするを最好とするものなれば、埤圳を閉塞するも敢て困難にあらざるべきを信ぜんとす、單なる素人考へを以てして葫蘆墩に貯木場を設けざりし理由を知るに苦しむものなり。

土牛より更に臺車にて東勢角に向ふ、途、大甲溪の河床を横る、先年水害にて軌條流失し假修繕のものならむ、木レールにて張り鐵頗る不完全、脱線河中の人

たらむかと膽を寒からしむるあり、此輕鐵は本島輕鐵界に於て收益の多き點に於て屈指のものなりと聞く、單に賃率値上げ收益增加を目的とせず施設の上に改善せん事を要す、我は一逆旅の人として監督課の一喝を希望して已まざるなり。

東勢角は大甲溪の右岸の小邑、支廳あり、地名を冠したる物產會社及拓殖會社あり、共に林產物を主として槻材の販賣を目的とす、前者は土牛に事務所を置いて近在の金穴劉氏一家の經營する所、後者は荒井成富系の新設會社にして此地に假事務所の設けられたるを見る、附近蕉實の本場なるも市場は土牛にあり、東勢角の町として何等產業の見るべく殷賑のあるべきを知らざれども、旅舍三軒料理店三軒あり、云く大勝亭、依姫樓、豐本と、玆に八仙山柚夫の所謂る「東勢角の尾のない狐」の住めりと云ふ、卽ち知る此地は八仙山二百人の消費地なるを、營林局は方針として猥りに下山せしめざるなりと、九里の川狩作業

容易にあらず、河床幾日の起き臥しを要するも猶も此作業に從事するを喜び競爭的に出役せんとすと、何となれば川は東勢角に通ずればなり、人心の機微穿ち得て妙なり。

この夜清原旅館に宿す、一日の行程に疲れを覺え、忽ち華胥に入りたればや、翌黎明に雨滴點々たるに醒む、今日よりしてテクらざるべからざるに、天我に幸ひせずかなど無有の意識を泛べたるに、何ぞ知らん筧の水の潺々たるにて、東天は紅を潮し中央山脈の餘波楣間に紫色を呈するを見る、旅舍の名の故にか何とはなしに晶子の「ほとゝぎす嵯峨へは三里京へ一里、水の清瀧夜の明けやすき」の歌を思ひ出さる。

二

十二月七日、七時東勢角を發し臺車にて大茅埔に向ふ、營林局Y書記東道

の主たり、此間軌道單線にして一箇月約八回のキンチョウ日（出船三日前）には蕉實の運搬頻繁にして上行の車を走らすに遑あらざらしむ、沿道點在する小屋に「醫生某々出張所」なる看標を見る、醫生なる文字と共に小店内に百付簞笥を整へ藥研に草根木皮を切るを見て少なからざる興味を感ず。

大茅埔より大甲溪の磧を行く二里餘、大半は牛車通ず、これ此間唯一の交通具たり、これより山間の小徑を行く、羊腸起伏す、土人は叉叉を組合せたるが如きものを以て輕量の物資を、また槻挽材一間乃至一間半の如き重要品はトランプのジャクの持てる弓の如き形せるものゝ中央に之を縛し兩端を持して擔造せるを見る。

白毛橋畔を過ぎ稍來坪（サアライヘイ）を經て白冷に至る、大甲溪は河口より六十分の一勾配を以て昇り居れり、此地海拔二千四尺なり、此邊一帶は蕃界にしてタイヤル族の

分散居住する所、駐在官憲の理蕃撫育著々功を奏し、水田耕耘を敎へ或は蕃人を使役し埠圳工事を行ふ、白毛駐在所にては蕃女に機織の法を敎へ居れり、之れ駐在警官妻女の餘業なりしも過般産褥熱の爲め永眠せられ今は中止の姿なりと、蕃界交通不便の地にて助産の設備完からざるべく玆に夫君の業績を援くるに專一にして身之に殉じたるものと云ふべきか、如此き亦撫育蕃史上忘るべからざるところ、思て一掬の涙なからむや。

白冷、高冷にて二度大甲溪を横ぎるに鐵線橋を以てす、高冷橋は百七間四尺、共に本年の新設にかゝり乘て動搖せず、敢て匍匐するを要せざるが如し、我未だ鐵線橋を渡りし事摟指を以て算するに過ぎざるも、之れが經驗によれば大體架橋法式に二種あるが如し、(一)はメインケーブルに全力を懸くるサスペンションブリッヂの夫にして(二)は全力を夫自力の上に懸け何等の支持物を有せざる

ものなり、此邊に架けたるは皆後者の樣式に依る、構造の概略は八番鐵線五十二本を張る、主たる重量は低部の二十四本に懸る如し他は欄干の如き作用をなすのみ鐵線橋材料費を一哩四百磅として磅の單價時價にすれば二十一錢とせば一尺一錢五厘高冷橋百六間一尺に要する鐵線延尺三万三千百二十七尺にして四百九十六圓九十錢となる、之れ主たる材料にして他は勞力費を加算せば全工事費を出すべく、猶之を知らむとせば當該廳を煩はすべく敢て余の關する所にあらずと云はんか。

白冷より高冷、裡冷を過ぎて久良栖に至る二里餘、大甲溪右岸の山姿圓滿雅容にして、松樹多く臺灣楓紅葉して此の間を疎らに點綴し、風致頗る佳、宛も桂川の上流を遡るが如く暫く人をして身臺灣にあるを忘れしむ。

久良栖(クラス)に著せしは午後四時枕木一万五千挺の土入(ドイレ)作業(木材を山より川に入

る丶事を云ふ）を見る、土入には先ず木馬の捨場より川迄約五十間の間三十分の一位の勾配を以て修羅盤臺を張る、之れ卽ち Sliding bed とも稱すべきものにして、此ベッドに水を懸け滑潤ならしめて木材を滑走せしむるなり、枕木の如き輕量のものにありては修羅の中途にて鳶口を以て力を加へ或は水を掛くる爲め數人の人夫作業に從ふ、木材を修羅に入るゝにマヤ（修羅の出發點にして材木の溜れる所を云ふ蓋し厩の音便なるべし、木馬より荷を卸す所よりかく稱するなるべし）より引出し押し流す作業に十數名從事す其中內地人二名あり、彼等は生來の山師にして苦力の數倍の作業をなし、殊に內地人のみの場合より一段の敏活を加ふと、彼等の熟練輕快驚くべく、土入口に用事の起るあれば一挺の枕木に乘て修羅四十間を滑り下る、見る者をして手に汗せしむ、之れ人種的或は技術的優越感を有し之れに對する責任を思ふ故か、能率增加の上に於て得る所

八仙山の修羅

僅少にあらざるべし、此の仕事は鳶一挺の使ひ方の巧拙によるものにして、本島人苦力の勞動率の低下を意味するより、寧ろスキルフルレバーと其の然らざるものとの區別によるなるが如し、此日五千本の土入をなしたり、三日にして一萬五千を盡す如きも、最後には上部より盤臺組立を崩して流し順次降るものなれば、盤臺組立より最後の土入迄一週間を要すべし、土入を終れば木端（キバナ）（管流の先頭）に數名木尻（キジリ）に四十名之に從ひ淺瀬、側流に停滯するものを整理して前進し、夜に至れば木端を矢柄に組みて先頭の流失を留む、如此くして大甲溪九里の間を川狩して土牛に至る約二週間を要すべし。

駐在所に敬意を表し、營林局久良栖詰所に投ず、入湯一盞を傾けて陶然、松籟輕く溪流潺々として更に人事を厭はんとす、時にあやしくも親しき鐘の音す、これぞお湯の知らせなりと云ふ、駐在警察官家族の浴終れば此の鐘により

附近蕃社に知らせて彼等をして浴せしむるなりと。昔西班牙がフヰリッピンを領有し土人教化の方法として植民學史上有名なるかの Bringing under the Bell の制度に比すべく、彼は教會の鐘の下に集め主として、宗教的教化を施すを目的としたるものなるに、我が久良栖の鐘は更に實體的にして不言の間に教化撫育の行はるゝ所、治者被治者間に脈々の溫情の流るゝを見るべし、この鐘の音小なりと雖も之を打つの人は植民政策の祕訣を握れるもの、坂入警部は一面の識なりと雖も頗る溫厚篤實その業によりて其人を幽香しく思ふものなり。

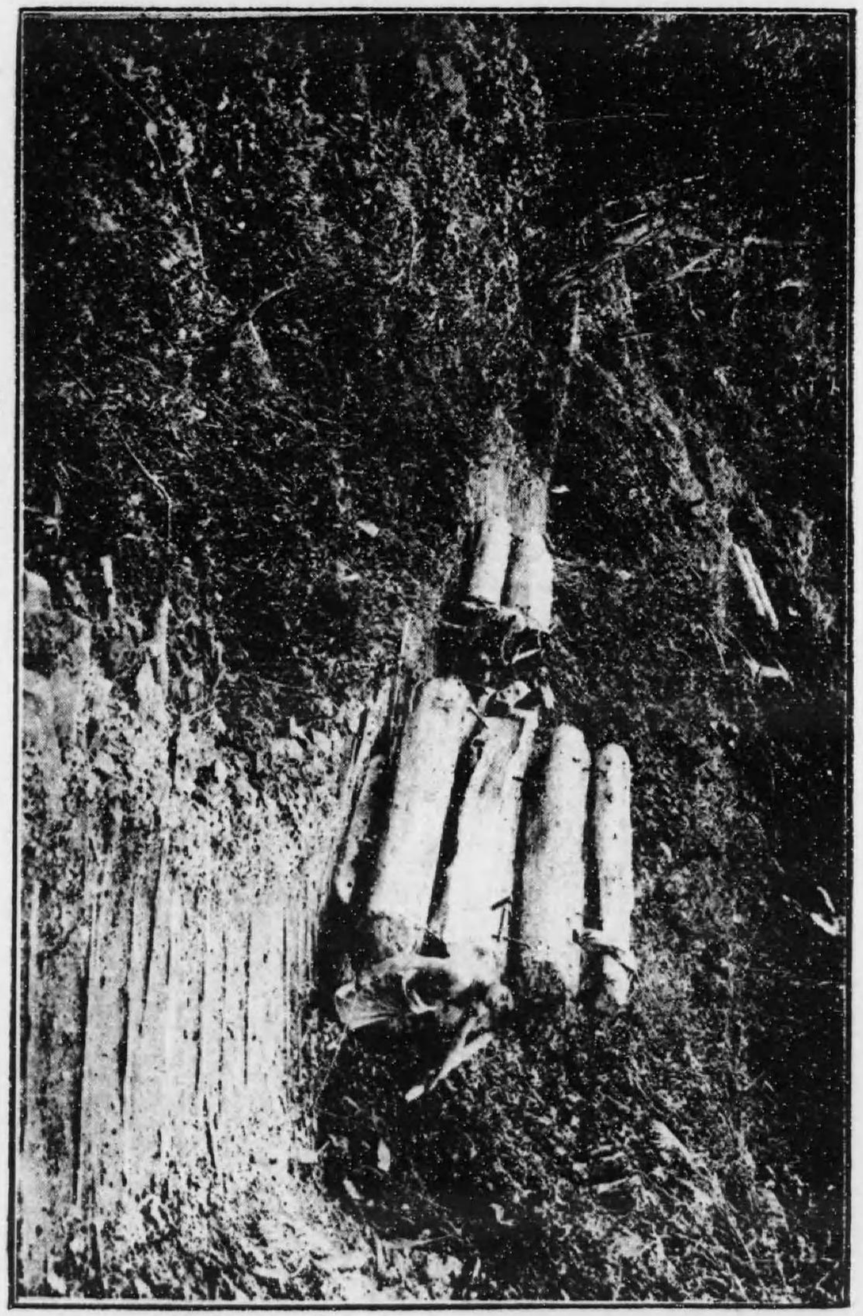
三

十二月八日、今日より登山す、S營林局技手巡査部長行を共にす、寄り附き三町餘、樹間の急坂を縫うて木馬道(キンマミチ)に出づ、木馬は八仙山に於ける主要なる運材

方法なり、木馬道の幅員は五尺乃至七尺にして平均六寸最急一尺一寸勾配（一間に對して云ふと即ち十分の一乃至六分の一勾配）を以てスウイチバックにスパイラルに昇る、盤木と稱して枕木の如くに約一尺毎に之を敷く、盤木は樫材其他の雜木丸太を用ふるも急勾配には割盤木を用ひ其摩擦を大ならしむ、木馬は此盤木の上を滑走するもの、木馬は殆んど橇と同一形狀の者にして山間に豐富なる赤樫を伐倒し使用す、一臺約十五貫餘あり、之を曳くに熟練を要し、危險を伴ひ頗る困難なる者なり、木馬の盤木上を走るや見る人をして誠に爽快を感せしむ、彼等は熟練の技術を以て之を御し（木馬を御するにはハイ〳〵ドウ〳〵等の掛聲を用ふ）盤木と木馬と摩擦し燒けて煙を引き一種香ばしき木の香を殘す、軋音林間に樂を奏するが如し、木馬一臺にて八尺締乃至十二尺締を載積す、一臺の耐久力三十五尺乃至四十尺締にして八十尺締を運搬し得たるものは頗る稀

なりと、故に往復約五回にして使用に堪へざるに至る、現今は木馬道二區域に分たる、上區は距離約二十丁下區は三十九丁餘あり、上區は尺締十五錢一日四回往復することを得、下區は二十錢二回往復すべし、平均一臺八尺締載積せば一日上區に於て四圓八十錢、下區は三圓二十錢の勞銀を得べし、載積量により運搬回數により一日五•六圓を得る事容易なりとす、木馬曳は最も體力を勞し、二日出役して曳けば必ず一日を休まざるべからず、雨天其他により平均月十五日勞働す、然して杣夫、木挽、日傭（之れ一種の仕事の名稱にして修羅、採手を張り轉材技術を行ふものを云ふ）に至るも賃銀は凡て工程拂にして、雨天には殆ど收入なきものなるも、月に三日分だけ公休慰勞の意にて平均賃銀の三分を給す。

登る程に林帶樹種を變じ、ケヤキ、アベマキ、モツコク、クリカシ（土名林利加と稱す、栗實生ずるも內實を生ぜず、枕木として素材の儘使用せんとするも



の)アカガシ、臺灣松、漸く上部溫帶林に移りて六千尺以上にして針葉樹の純林に入りヒノキ、ベニヒ、ヒメコマツを生ず、針濶樹混生林に入る頃より氣溫頓に低く、力步登攀すれども冷風腋下に生ずるを覺ゆ。

蛇木溪詰所に著せしは午下一時、玆はバロメーターに徵すれば六千二百尺、遠く目を放てば大安、大甲足下にありて蜒々、忽にして溪谷より霧を生じ呎尺を辨せざるゝに至る、入りて爐を圍みて三宅技手、(現所長三宅技師)桑野技手と談ず、寒氣身に沁むを覺ゆ。

八仙山に於ける勞働組織を見るに、人夫十名乃至二十名を一組とし之れに組頭を定む、之を庄屋と云ふ、一組は一の小屋に住す、小屋の構造は屋根も四壁も全部檜肌葺きの極めて簡單なるものなり、中に二十疊餘を敷くべし、中央に爐を切り焚火す、八仙山作業以來三年未だ一度も消えたる事なき爐なりと誇る

ものあり、各小屋に炊事場及風呂の設けあり、庄屋たるものは通常妻女を有し小屋全體の食事を賄ふ、庄屋は其組の者の給料受領代理人としてのみならず監督の實權を有す、庄屋の下に小庄屋ありて庄屋を補助す。

杣夫、木挽、日傭其他各種の專門作業に關する最も老練熟達の者を選み之を代人とす、代人は役人に代ふるの意にして人夫の作業を役人の代理として指揮監督するもの、人夫は工程拂賃金なるも、代人は一定の給料を支拂ばる、多少の差異あるも日給一圓三四十錢を受く、人夫の受る所より一日のみを比せば少きも一種の名譽職として頗る尊敬せらる、代人は人夫を監督する側に立つものなれば各組小屋より獨立して代人小屋を組織して玆に起臥す、然共代人も人夫の一種にして代人、庄屋、小庄屋、人夫の總取締をなす者を總頭と稱す、總頭は全山人夫の第一人者にて頗る勢力を有す、人夫は一般に庄屋を旦那と云ひ、總頭

を大旦那と尊稱す、總頭は役人の規畫する伐採計劃を實際に指揮するものにして頗る山に明るからざるべからず、八仙山總頭細江氏飛驒の產、年配五十を越ゆべし、風采貫祿備はり一山の重きを託するに足るを思はしむ、木曾飛驒の風として「タッッケ」をはき、黑木綿の長羽織を著し、鉈に似たる山刀を帶び腰皮を下げ陣笠樣の菅笠を冠る、宛として昔の山奉行を思はしむ、氏の風采をカメラに納めざりしを悔ゆ。

四

十二月九日、岩間の淸水を筧に受て盥嗽し手の切らるゝ思ひあり、爐の焚火にあたり朝茶を汲む心地よさ、本年度伐採地佳保溪に昇る、蛇木溪より集材軌道の終點迄二町餘、絶壁にして登攀甚だ難し、山の人に云はすれば鳥渡そこな

りと云ふ、蓋し此烏渡は容易にあらざるなり。

軌道の終點より蛇木の間に修羅及棧手運材を行ふ、枕木に於けると方法は同一なるも、尺乃至二尺二間材の丸太が修羅棧手の滑走展轉森閑の音、溪谷に響す、雄大比すべからざるなり、棧手は修羅の如く溪間に直接に材木を竝べてスライジングベットとなすを得ず、溪谷の勾配の甚だしきものは雜木を組立て相當の勾配に變更をする手段方法を云ふ、其の作用は修羅と同一なりとす、修羅轉材一區間約五十間程にマヤを造り惰力を靜止せしむる如くす、然らざれば轉々留むるを得ざればなり、マヤより木を引き出し押し渡らしむる所謂「マヤばかり」をなす毎に一本〳〵に人力手數を要するなれば成る可くその少からん事を希望するも、地勢の關係上マヤを設くるを得ざる場合、或は之を必要とせず一時に百間餘をも轉材せしむる場合には、其の中に臼なるものを設く、臼は世界

獨歩ものにて日本固有の發明方法なりと云ふ、之れ一種の制動方法にして土及檜皮を以て造たる一種の Buffer stop にして臼狀をなしたる穴なり、修羅棧手の上を非常なる勢を以て滑走したる木材は臼に入りて制動し極めて弱き反動の力を以て臼に入りたる點を中心として九十度以上の鈍角に方行變換をなして臼を基點として、次の滑走を初めて次のマヤに至りて靜止する也、軌道集材は最近の施設に屬す、三哩餘、木馬道より勾配緩なるもブレーキにつき大ひに研究し、更に安全を期せんとす、二呎ゲーチにて軌條は角板山に使用せしものと云ふカネギー型腰高九封度にして使用既に年あり、重量の運搬に危險なるも御手のものゝ檜枕木を一本につき十挺以上を入れ以て缺を補ひ居れり。

臺車及木馬の積載材の捨場に荷卸するとき、一々檢尺して其工程賃金算出の標準とするものなれば臺車押、木馬曳は利害の懸る所なれば檢尺する者卽ち檢

知（検地よりの轉用か）は頗る公平ならざるべからずされば、検知は彼等を威壓するだけの力を有する者ならざるべからず、検知は代人の仕事に屬す、検知の方寸によりて材木の大小決するものなれば、私營事業に於ては検知の敎へとして「旦那を食はすに尺を食へ」と云ふ、其意は検知の給料は尺を増して計り其給料を其の中より食ひ出せとの事なり、官營に於ては極めて公平の立場に於てなすものなるも、木馬曳臺車押の勞力を思ふ人情の美點よりして、之を如此き關係より全く自由なる阿里材と比すれば、八仙山は多少の尺ヅマリ無しと云ふべからざるが如し。

杣及木馬其他の検尺に於て一種の山言葉を用ふ、之れ四●七●一の如き數字は山間響音を生じ明瞭を缺く爲なるべし、下記は此山に用ひる所にして飛驒木曾其他殆ど一般に用ゐらるゝものゝ如し、六寸以下は此山になき故に記せず。

六　助（或は毛谷村）　六寸
八百屋（お七を意味す）　七寸
矢　藏　八寸
九兵衛　九寸
はらいた（癪の意）　尺
ちんころ　尺一寸
地　犬（或は里犬）　尺二寸
狼（おほかめ）　尺三寸
飯　盛　尺四寸
金　吾（或は滿月）　尺五寸
ほくろく　尺六寸

振り袖（十七娘の意か）　尺七寸
虚無僧（尺八）　尺八寸
二シャ〇　二尺
三シャ〇　三尺

而して此檢知の寸法を記載する野帳を「うぐいす」と稱ふ、古書に呼子鳥帳など書す、檢知は此谷にありて一聲高く反響は彼の峰の記載者に答ふるの意ならむ、杣夫の風流ゆかし。

漸く佳保溪に攀ぢ之より數町にして八仙山頂に達す、玆八千尺眼界開け、埔里社は足下に見るべく、彼所に巒大山横はり、遠く新高の二峯雲表の裡に聳立し白雪の置けるを見る、神聖とは如此ものに冠すべきを思ふのみにして筆舌に形容のボケブラリーに乏しきを嘆ず。

蛇木に下りて晝食し、直ちに下山し此夜久良栖に宿す、道は往路に同じく、十一日夜臺北に著す、歸來倉皇の裡にペンを走らせ文甚だ體をなさざるを怨む。

〔大正七年十二月臺灣鐵道〕

淡水ゴルフリンクより

一

サンチヤゴー城を西して四町、其處に淡水ゴルフリングの横る事は、今では少くとも臺灣でスポートに興味を有する人、凡てのノベリチーに對して敏感なる人々の注意には漏て居ないことゝ信じますが。更に臺灣にゴルフリンクのあると云ふことが、モー少し知らるべくして、未だ知られないのを遺憾とします、既に九ホールを持つものは（十八ホールが正規のものであるが）世界のゴルフ史に載せらるべく、彼處のゴルファーにも覺えらるべきである、日本に於ても九ホールのものは　攝政宮殿下の御台臨になつた東京の駒澤村のリンク、神戸の

六甲山、長崎の溫泉嶽、大連の星ヶ浦、此等のものゝみ僅かに半周（九ホール）が出來得るのであつて、僂指に餘る爾餘九ホール以下のものは、リンクとして餘りに大きな顏が出來ない譯である。淡水ゴルフリンクに付ては、何事も云ひ控へをしなければならないとするも、其風光明眉の點だけは誇るに足ると思ひます、石井光次郎氏の歸朝談に、其設備の未だ至らぎるものあるも、猶ほ世界第一のものと云ふに吝かならずと云て居られる。爰には淡水リンクの成立と沿革の多くを說きますまい、練兵場に徒にクラブを振り舞した時代、淡水にホールを開拓した時代、本年三月のクラブハウスの新築、九ホールの擴張等に至る迄、夫等を通じて變らざる熱心な會員及陸軍當局の好意ある諒解、プレイは一度もせずに會費だけは喜んで出して下さつた會員、一度入つた以上は意地にも脫しないと云ふ所謂維持會員、リンクが此等凡ての御蔭を被つてることは誠に尠少

でない、で私はリンクの近況を御話し申し上げる事によつて、所謂維持會員の方々が偶には淡水へ御出掛になることを慫慂し、且つは此リンクの恩人たる櫻井氏、原氏、下村博士にお禮申上げ、嘗ては此リンクのスクラッチプレーヤーであつた、青池、藤野、小西、石井、内藤、松尾の諸氏へのお便りともしたいと思ふ。

二

斯うした目的には添はないかもしれませんが、ゴルフについて一般的興味を晩る爲に、其概念と競技方法とを申上て見たいと思ひます。試みに爰に美しく芝刈られた廣々とした少くとも二萬坪以上の野原を想像して見て下さい、その一隅から第一のコースを取ると致しませう、其コースの球を打出す處卽ち、チー（Tee）を設け、其處から約二百碼の距離の處に二十坪乃至三十坪を極めて

美しく丸てベルベットの樣に芝刈られた處を作り、之れをグリン（Green）と申します、其グリンの中央邊に直徑四吋の穴を造ります、要はチーから球を打ち出してグリンにあるホールに入れるのにあるのです。球はゴム製のもので直徑一吋六十四分の四十二、重さは二十九オンスのものを標準と致します、球を打つ桿をクラブと申しますが、其形は挿繪で說明しても實物を見ねばお解りないかと思ひます。其に付て面白い話は曩に國語學校長たりし某氏が、閑暇再遊の砌り淡水リングに於て初めてゴルフなるものを知り、之有る哉、これ眞に理想的運動法なり、臺灣の如き熱帶地に於て中年者以上の者には此運動を奬むべし、予は本島に止つて斯技を宣傳弘通せしむるを得ないからせめて、ゴルフの道具でも廣く世人に觀覽させ、之を知らしむることに依つて之を普及せんと、自から博物館にクラブ一式を寄附せられた、今に夫れが片隅に陳列せられて居

るか、或は物置に塵に塗れて居るかは知らないが、流石に敎育家だけに國民保健に意を致さるゝの厚き眞に感腹に堪へないものである。

夫は兎も角もとして實物が見られなければ手近なのは「ゴルフ」と云ふ賣藥の看板にあるあの振上げてる棒です、夫はクラブの内の一種でドライバー（Driver）と申して、柄の長さも一番長く、最長距離を飛すのに用ひられる、私達でも當りの良い時には二百碼近くを飛ばせます、レイなど云ふ世界的選手は平均三百五十碼は樂に飛ばすと云ひます、思うても見て下さい、自分の打つた球が百間も先きの處に或は高く、或は低く、右にも、左にも、思ふ通りに飛んで行く愉快さを、人間の膂力の一擊に、之れ程に飛ぶものはありません、ゴルフの球は鐵砲の玉に次で飛ぶと申します。ベーブ●ルーズ本疊打の如きは物かわです。

序に道具の名稱だけを申上ますと、ドライバーに次いでブラシー(Brassy)スプ

流水リンクにて

ー(Spoon) バフイース(Bappice)など此等のものは柄も頭部も凡て木製です、所謂アイヨン類と申しますのは、頭部が鐵で出來て居て、宛も鳶口の先きの丸形になつた樣なものです、先頃大阪毎日紙に掲載された、菊池寛の小説「火華」のカタストロフエに資本家の令嬢に夤縁した二人の若者が其の應接室に白及とゴルフのクラブで渡り合ひ、相擊ち相戰ひ、白及は遂に打ち倒されて凡ての終局がつくと云ふ事になつてる、之れは確かにアイヨンの一本を用ゐたのでせう。

三

アイヨンは球を打つ斜面の勾配によりてクリーク(Creek)ミドアイヨン(MidIron)マシー(Mashie)マシーニブリック(Mashie-Niblik)ジガー(Jigger)ロフター(Lofiter)ニブリック(Niblik)など、云ふ色々な種類があります、別

にパッター(Putter)と云ふものがありまして、之はグリンの上に於てのみ用ゐます、夫からドライバーはチーから打ち出す時にのみ用ゐます、其他の道具は球がコースの途中で落ちた處の地勢に應じて使ひ分けるのです。要するに此等の道具の或物を用ゐて、幾つ打つてホール(穴)に球を入れるか、其數の少い程良いのであります。

四

例は二百碼のコースなら三つ打ち、即ち三點で入れる事は少しく上手になれば出來ない事でないが、然し二點で入ると云ふ事は絶對とは云へないが、非常に六箇敷い事である。さればとてホンの近來初めた人でも五六點で入れる事は敢て困難でない、つまり一コースにつき一點二點の差が非常に問題となるのであ

つて、此處が斯技の入り易くして達し難いものとも云はれて居る處であります。

五

本年の世界選手權仕合が倫敦のサンドウイッチでありました、毎年米國から大勢の選手が押し寄せて英國を打ち敗らふと致しましたが、今まで怎麽にしても勝てなかつたのが、本年初めて米のハーゲンが英のダンカンに對して三百點對三百一點で勝ちました。(十八ホール一周を四回戰にて決す)僅かに一點の差ですが、如何に貴重な一振りだつたのでしやう。勝負は何事でもそうですが此一振で英國の斯界の覇權が米國に移つたのであります。

六

一つのコースの距離は長短區々でありますが大抵二百乃至三百碼あります。長いものになると五百碼に餘るものもあり、又短いものは百七八十碼に過ぎないものもあります。短距離のものは途中にハザード即ち障碍物を設けて困難にして居ます、通常十八ホール即ち十八コースの總延長は六千碼内外で半周のものでも三千碼はある事とします。

七

我が淡水リンクは九ホールに擴張した時に、一七三七碼でしたが、最近二つのコースに繼き足しをしましたが、猶ほ一八二〇碼程しかありません。然しバンカー(堤)を三四箇所增設し、加ふるに天然の斷崖を利用する等の事をしましたら、距離が短いとて左のみ打ち易いものではありません、之は云ひにくい事で

すが、ラフが多い事によつて距離の短いのを補うてるとも云へます。淡水は場所が狹いのでありません。金さへあれば十八ホールが二つも取れる餘地は十分あると云ふことを附け加へて置きます。

八

我淡水リンクも最早や練習リンクの域を脱して正式のトーナメントが出來る樣になりましたから、最近に至つて始めてパー(Par)とボギー(Bogey)とを定めました、パー六十八點、ボギー七十四點と致しました……實際は半周の九ホールですから前者は三十四點、後者は三十七點なのですが駒澤リンクと同じく二周して勘定する事として世界的標準に一致させる事としました。

九

パーと申しますのは各コース毎について人間の出來得る最少點を累計したものであつて、先づ何人にも全コースをパーの點で打ち得ないものと云ふのが適當と思ひます、即ち各コースの標準點の集計なのであります、ボギーとは傳說によりますとカーネル●ボギー氏なる不可思議なゴルフの天才があつて、其人が各リンクに於て擧げ得る成績其人の持點を其リンクのボギー最高標準と定めます、要するに其リンクの標準點であつて、何人も此處迄は練習次第で出來ねばならない、即ち上達し得る目安であります、日本でボギーは川崎氏一人だと云ふことですが、石井君の話によると英國では各リンクのボギーが三百人以上あると云ふ事です。

一〇

如此ボギーが定りますと各自が其リンクを廻り得る平均點を定め、此點とボギーとを比較して其差をボギーに對するハンデキャップと致します、例せばハンデキャップ十點の人は其處のボギーが七十四點ならば八十四點で其リンクを廻り得ると云ふ事になります、技量の違ふ人もハンデキャップによつて勝負をして行ける事になるのであります。

一一

競技の他の方法としてフオーサム（Foursome）と云ふのがあります、ツーボール●フオサムとフオアボール●フオサムとがあります　攝政宮殿下が駒澤で遊されたのは前者であつて、殿下とボギーたる川崎肇氏と組まれ、相手は黑田伯と日本選手權を有つ田中善三郎氏との組で結局同點無勝負に終つたと承て居り

ます、之れは一組は一つの球を二人にて交互に打つて其合計した點と相手方の組の同じく合計した點と競爭して勝敗を決する方法であります、フォアボールス●フオサムは各組の各人が自分の球を打つて行つて其組の最好成績の球と相手方の組の最良の球の點數と競爭する方法を云ふものであります。

一二

此頃から在留外國人も會員とし加入することになりました、淡水リンクも次第に人々に覺えられる時が來るでせう、先き頃も厦門の藤井領事と厦門大學のライト教授とが遙々道具を携へて來場し、プレイをなすつたことは、我々會員の非常に愉快と感ずる處でありました、我かリンクも近き將來に於て大に內地から、對岸から、世界から、認られる時期が來ることゝ密かに喜んで居ります、

さながら自からの天才と麗資とを朧げに自覺せんとする處女の樣に、鳴り止まぬ緒琴を抱くの思を致して居ます。

〔大正十一年九月臺灣日日新報〕

三年前に書いた此記事も今から見れば隔世の感があります、此頃は臺北の名流間に「ゴルフせざるものは人間に非ず」と謂ふ喧しいスローガンか流行て居るさうです、淡水も二千八百碼に擴張し、また臺南にも高雄にもリンクが出よふとして居ます、此記事を爰に採り入れて其時分の私の思ひ出とします。

洗心亭之記

王勃、幼にして滕王閣の序を作る、苟くも一亭一樓を修するや詩歌文章之れあらざるべからず、臺灣遞信協會は地を草山、詳言すれば臺北州七星郡北投庄紗帽山三五五の一の地に相し、敢へて大厦高樓に非ずと雖も清洒端麗なる郵便局及療養所を造築す、田督憲之に命ずるに洗心亭の題號を以てす、爰に於てか洗心亭の記あらざるからず、先人大鹽後素洗心洞劄記を作れりと聞くと雖も比附援用すべくもあらざるが如し、依つて迂愚魯鈍を盡し、舞文亂筆を携へて亭の大觀を敍し、以て未だ之に遊適せざるの士に彷彿するを得ば記者の願之れ足ると謂はんか。

草山の地たるや敢て禿筆を呵するを要せず、鳳駕一度幸ひして景の絶勝たるは擧國の兒童將卒と雖も之を知る、細毫の敍景を要せず、先ず亭に座して之を望めば巍々として雲表に突凸たるは大屯紗帽の二山なり、水波漫々として津涯を見ざるは淡水河ならむ、復道の空に行くは未だ霽れたるに何の虹ぞと謂はんとす、之れ草山北投道路なり、卽ち知る亭は草北二十分の一勾配道路の分岐首點に臨み　殿下御休憩所たる草山堂に疎林を隔てゝ對位す、景勝の地に於ける形勝の地點なり。

亭はテラッセに座す第一段は卽ち郵便局にして建坪一八坪七五バンガロー風の洋建築、四圍の下見板は寸餘のものを用ひ特に彫澤加工を加へざるの素地にクレオソート塗りとす、簡易なる手法にして誠に風雅愛すべきものあり、中段は卽ち共濟組合の療養所にして、建坪四七坪二五工費一萬一千百餘圓を投ず、

六疊四室を併列し兩椽側附なり、木口は臺灣產、亞米利加產檜を用ふ、玄關の意氣造りなる、浴室の廣濶清淨なるは共に稱すべし、組合は大枚二百金を遞信協會に貸して療養に資す、洵に故ありと謂べし、上段は特に客室として造らる十六坪六三・八疊六疊迴椽なり、此部分は本建築を請負たる臺灣土地建物會社の寄附せしものなり、世に云ふ上中下三段の構は此の亭に濫觴すと謂はんか。然と雖も洗心亭の名の依つて來る所以は上段の部分にあり、督憲の暫く此所に朝夕を送られ、自から洗心亭の文字を選せらる、又遊草山溫泉と題しとて左の七言絕句一首を寄せらる。

纔入山中翠色鮮　七星峰下浴靈泉
南方亦有淸涼國　吟坐綠陰溯水邊

鳳駕に供奉して曾遊せし入江侍從長及國府犀東氏洗心亭の題號新たに成るを

聞かれ、特に遞信協會の爲めに錦繡の雅懷を披瀝して

洗心亭にものして　爲守

たに水の岩かけめくるおときけば
人のこゝろもさわやかにして

癸亥四月念五日供奉草山閒　犀東

郵政局所屬一亭新成率賦此

鶴駕迢迢度碧岑　賜褒天賴細於琴
許由到此知忘我　洗耳溪聲又洗心

侍從長入江爲守子爵は御歌所頭を兼ねらるゝは人の知る處、其の和歌の麗朗

明珠の如き、吾曹野人の克く覗ひ知る能はざる處なり、色紙に掲毫せられた水莖の跡の見事さ、誠に想華筆跡二つながら當代に得易からざる珍寶なり。

國府犀東先生の漢詩は寔に世に定評あり、敢て娓々の言を要せざるなり、如此き絶寶卽ち協會各員共同の有となる、嘗て協會の有は之れ單なる茅屋に過ぎざりしが、今や洗心亭の題によりて貴く、洗心亭の名は讓山督憲、犀東先生の詩によりて尊く、入江侍從長の國風により、錦上更に花を添へ、眞に光彩陸離たるの感あらしむに至る、蕪文洗心亭の記の如き、誠に無用の業なりと雖も其然る所以を我が會員諸君に聞知共樂せしむるの一助とならば、或は閑文字にあらざるべきを以て自から慰むるのみ。

〔大正十二年八月〕

トルストイと汽車と

一

私は近頃流行るトルストイヤンでも、ユーマニストでもない、然し汽車屋（レイルウエイヤン）である事は事實である、トルストイと汽車とを並べて話すのは隨分突飛な事であるが、汽車屋が偶々小説でも讀むとこんな事を書くに至るかも知れない。

誰だつたか皮肉な奴が云つた、近代の哲學は何等新しいものはない、昔の糟粕を嘗るばかりである、それより近來代生活の特徴たる汽車や汽船の哲學を書いた方がよいと、其は兎も角もとして、近代の文學に其叙景に於て汽車と云ふもの無しに書くことは出來ない、例へはトルストイの「クロイチエルソナタ」の發端

は永い〳〵數日を乘り通す退屈な汽車中の話から始められてる。「アンナカレニナ」ではウロンスキー伯爵が母をモスコーの停車場に出迎へに行く所から始めてる、此列車には母と他日の情人アンナが同車して來てる、車がホームに入て靜に停車すると、車掌が笛を吹いた、ソレから客が降ると書いてある、私は不幸にして未だ露國鐵道の運輸規程を研究してないから、停車後那麼な意味で笛を吹くのか知らないが、多分露西亞の汽車は危險だから、停車しても又飛び出すかも知れないのでそこをよく車掌が確めて置いて、皆さん降りてもそろしう御座いますと相圖するのだらうと思ふ、飛び降りをやつて失敗じる恐れがなくつてよいかもしれない、ウロンスキーが母は何處に居るだらうと呆然としてると、敏捷らしい車掌が來てウロンスキー伯爵夫人は其所の箱に御出ですと敎へたと書いてある、此車掌はウロンスキーの顏を知てたと見える、中々敏捷なも

のだ、其土地、其線に關係のある人の顏迄も見知てると云ふ事は全く望ましい事で、這那心懸は我が車長諸君に有つて欲しい事である、鐵道院で運輸事務所長の名を知らないのが多數あつたと云ふのは以て露國の車掌に相去る甚だ遠いと云はねばならぬ。

二

トルストイの一八七一年六月の手紙に下の樣なのがある、「私は展覽會を見物して、その爲め少し遲れた、停車場に著いたところ、第二鈴が既に鳴つて、切符はもう買へないと來た、とそこへ淑女と腕をかはした蓬髪の一人の紳士、私の方へ駈け寄つたが、扨て大股に私に面して歩を進めながら「貴方は切符をお買ひに爲りたいのですか？私は切符がいりません、何しろ私の荷物が到著し

ない爲めに切符は無駄になります」と云ふ。「私はヌイシニまでの切符が一枚入用なんです」がと彼に云ふと、彼がそれに答へるのに「矢張り私もヌイシニまで行くのです」「でも一枚の切符ぢや私はどうにも仕樣がありませんねえ、二枚要るんですから」といふと、彼はそれに答へて「私の持てるのは二枚ですよ」、そこで私は二十留を彼に拂つて、車に飛び乘つた、すると第三鈴が響いて列車は動き出した、一體全體どういふわけか私にはちつとも分らない、がしかし珍しい事で、まあめつたに出會はせない事だつた、」と書いて居る、トルストイの爺は法律の事は餘り知らない樣である、商法や鐵道運輸規程は讀んだ事がないだらうから、何が何だか薩張り解らないと云てるから、私が代つて說明してやらうと思ふ、兎に角單に之だけの事を途中からわざ〳〵家族へ書き送てるのは、何事にも著しい興味を感じ之を傳へやうとする天才の心持が面白く思はれる。

一體切符卽ち鐵道乘車券なるものは通常無記名式にして（定期乘車券は記名式）法律上の性質としては、運送契約に依りて生じたる運送をなさしむる權利を表彰する無記名證券で、自由に之を讓渡する事を得るので、運送人卽ち鐵道は其切符の所持人に對して運送をなすの義務を負て居るのである、無記名證券之を廣く云へば、有價證券は財產權を表彰して權利の利用と證券の占有とが私法上分離すべからざる關係を有し證券の移轉が權利の移轉を伴ふものである、切符を渡す事は權利を移轉する事である、運輸規程には改札前に勝手に移轉してよいと書いて無いけれども、有價證券の法理上當然の事なのである、然し改札後は無記名證券たる性質を失つて讓渡を許さないものとなる、何となれば、運送人は特定の一人を運送するの義務を負ふものであつて、改札すれば特定の一人に對する運送行爲が開始されたのであるから、改札後の乘車券は單純なる證據の爲

めの證劵で、卽ち鋏を入れると云ふ事は無記名の有價證劵を回收して、之に代ふるに證明書を與へると同樣なので、改札によつて全く別なものになるので改札後の切符は下足札の樣なものである。

現在の法律上の解釋では、切符は運送契約を締結し之より生ずる權利を表彰するものとしてるが、誰しもこんな面倒な事を考へて切符を買てる人は無いだらう、實際運輸規程第九條にも、列車の出發時刻十五分前に乘車劵の賣出を開始すべしとあつて 乘車劵なるものを賣ると云ふ觀念で規定してるのである、現在では切符なるものを賣ると云ふ學說は世界中に一つもないが、將來は必ず此學說が出來るだらうと思ふ、法律上の構成に於ても最も常識に適した解釋をすると云ふ傾向が、近代法律學の最も著しい特色であるからである、然し切符を賣ると云ふ說を取るも實際上は差支ないのではあるが、之によると有價證劵に關す

る現在の學說の全部が倒壞してしまふ事になるから、有價證劵の理論が今日以上に進步した時に切符賣買說が實現するであらうと思ふ、トルスイトが切符の賣買を何が何やら薩張り解らないと云ふたのは、有價證劵の理論を心得て居らなかつた爲めか、此學說の實際に適合せざるを嗤笑した意味か、千古の疑問として殘つた譯である。

三

自分はよく轢死と云ふものを想像して見る癖がある、轢死者の心理狀態と云ふものより、汽車に飛び込まんとする瞬間の心持と云ふものに興味を感ずるのである、飛び込んで死ぬるまでの極めて瞬間的の心持は、樂しいものか悲しいものか、兎に角全く考へなしではなからうと思ふ、誰も私に此心持を告げて呉れ

た人はない、自殺者の手記など云ふものは大抵下らないもので、確かりした頭を以て書てない、私は「アナカレニナ」の末章に、アンナが轢死する所が書てあるのを讀で頗る面白く思ふ、列車に飛び込む所が天才の明劃な頭と、豊かな想像力によりて如何にも美しく繪かれて居る。「一番目の客車が自分の所へ來たと見て車の下へ身を投げ込まんとして、先づ自分の手提鞄を落さうとして次の車をまつ、海水浴を初めてやる時に覺る様な感がして胸に十字架を切る、このしなれた動作が幼い頃の記憶の繪卷を擴げて暗黑の色から暫く離れて生の歡喜に浸る、次の車が彼女の前に來た、手提鞄を落して肩と肩との間に首を引込てし舞ひ込む、客車の下に兩手をつき直ぐ立ち上る様に輕く跪いた瞬間自分のして居る事につき恐怖が彼女を襲ふつた「私は何處に居るのか、何をして居るのか、何の爲めにこんな事をして居るのか」と思て立ち上らうと後退りをしやうとす

ると何か知ら巨大な無慈悲なも物が彼女の頭を打ち彼女の背を轢いた、主よ凡てを赦し玉へと爭ふ事の不可能な力を感じて彼女は言つた」、如此トルストイは鐵道について著しい興味と諒解とを以て居た様である、少くとも前掲の手紙やアンチカレニア完成の一八七三年頃迄はさうであつた。然して晩年になつては極端な文明嫌忌の情から文明の利器をも嫌つて、ヤスヤナポリヤナから莫斯科に行くにも徒歩で行く事を習慣として居つたと云ふ事である、彼が最後の年に出奔して第一に行つたのはシエンキー停車場であつて、車中既に病篤く、更に旅行を續け得ずして、とある停車場に下りて、其寒い待合室に最後の息を引取つたのは一九一〇年十一月二十日寺の鐘の鳴る安息日の午前六時少し過ぎであつた、アスタボヴオ驛は世界的偉人の終焉の場所として永く記憶せらるゝに至つたのである、汽車を嫌つた者が停車場の待合室に死ぬなど如何にも因縁の

奇しきを思ふと共に、最後までもトルストイの生活は矛盾であつた、この少さな矛盾を最終として否この矛盾を生ぜしめ、死により此矛盾を解脱した爲めに、唯一の純正爲樂の境地に入たのである。

〔大正七年八月臺灣鐵道〕

スケルツオにして

一　メリアの平原に立ちて

若き日の思ひ出は謂ひ盡し難き歡喜の泉であらしめよ。何等の屈託のない自由な純眞な生命の躍る學生時代に於て、各自に備はる天分に應じ趣味に從つて何等かのウエルクを殘した事は、其人の一生を通しての生活法式に大きな傾向を與へるものである、夫が創作であり、藝術であり、音樂であれ、己がぢゝ行く處に行かしめよ、蠟嚙む樣なレクチュアーに釘附される惱ましいノート生活から遁れて、各自に芽生える生命を伸さしめよ。私は凡人教育を否定するものでない、然し凡人を造る自由なる學園が欲しいのである。趣味の芽を摘み、宗教を

嫌ひ、音樂を異端視する學風を唾棄するのである、這した教育に對して大きな皮肉を齎したものは同志社大學の演奏旅行であつた、私は若い人達の這したウェルクに共鳴する、私達が空想してた事が漸く實現してた樣に思ふ。

昨年カリホルニヤ大學が演奏旅行して日本へ來た樣に、日本の大學からも米國あたりに演奏旅行する樣になるのは遠い事でもあるまい。

私は音樂の一つ〳〵について記述もし批評もする暇を持たないが、此樂團が日本のマンドリン競演に優勝した「メリヤの平原に立ちて」の序曲の如何にも生命の充ち、統一洗練されて演出された事を記憶から覺び起して書ふ、此曲は如何にもマンドリンに適した華麗な旋律に富む曲であつた、トレモロの波の囁き、スタカットの美しさ、ギターが綺麗に入り交る處など非常に心地よいものであつた、殊に私達を喜ばしたものはコンダクターの如何にも學生らいし體

度、全校の名聲を一人で背負ふて演奏者をコンダクトすると謂ふのでなくつて寧ろ之れと一體となつて演出するその心地は實に感じのよいものであつた。此曲は此樂團の人々にとりて終生忘れられないものである樣に、臺灣の人達もあなた方の事と其學校を、此曲によりて思ひ出す事でしよう。

二　ムビース

近頃亞米利加の社會教育家から映畫、音樂及運動による社會改造 Recreation by Movis, Musie and Sport と云ふ事が強く主張されてる、映畫の社會人心に及ぼす影響は誠に偉大なものである、之からは宗教家となり巷に叫ぶよりも、創作家となりて一代を風靡するよりも、名監督となりて自己の思想主張を最も徹底的に宣傳し、社會の人心を握り去る事は、最も賢明なる方法でないかと思ふ、

今後の天才は男子一代の事業として映畫界に走るであらう。

映畫の强い力を臺灣でも大分認める樣になつた、然して近頃立派な映畫の來る事は頗る喜ばしい事である、其善いものを見る事は最も容易なる方法に於て頭の轉換をやり、時に思ひ設けざる刺戟に遇はされる事があるのである、私は若い人達よりも、今の四十以上の人達に善いムビースを見る事を慫慂したい。

此間の Way down to the East 之を「東への道」と譯するので、何の意味か解らなくなる、Way はスワンニー●リバーの歌の Way down と同じ樣に Away の意で、「遙かに遠く東方へ」と云はんか日本で云へば「東奥の故鄕へ」とでも譯したらよい、シカゴ邊りから遠く東方のメーン州あたりの純樸な生活と、現代アメリカの華美なる生活とを對照し、米國の社會問題たる Mock marriage（詐僞結婚）を强く諷したものである、私共はあのルウリヤン●ギッシュの冒險が

なくとも、其れがナイヤガラでなくつて紐育の近傍の河であつても、ギシュの乘てる氷塊がコンクリートで出來てるとしても、あの映畫から受ける感銘は忘れる事が出來ないものである、あの畫は亞米利加でも非常の大入を續けたものであるそうだ、あのフィルムには獨特の音樂がある、夫が日本では取除かれて、活辯なるものに置き代へられた、映畫の音樂的効果は實に重大である、大阪の松竹座あたりでは大分之が實現されてる樣である、「幸福の谷」などでもあれにオルド●ケンタキーホームの歌など奏してみたら嘸面白かつたらうと思ふ活辯は屹度無くなるべきものだ、然し外國ものに英語のタイトルがある以上は駄目であるが、此頃の「モレオー」は日本語でタイトルが書いてあつた、日本に來るもの皆這した風に出來て來る樣になれば活辯は無くなるであらう。

三　女學校のプール

私は河流れした才鎚に過ぎないが、水泳と云ふものについて非常に興味を以てる、先頃臺南に行つた時公館の裏の市經營のプールを見た、未だ設備の至らない點はあるが、給水及排水の好く考へられてる事は流石に細見學士の創意を思ふのであつた、頃者新紙の報ずる處によると高等女學校が其校庭にプールを設けたとの事である、誠に結構な事で心から之を喜ぶものである、僕が獨り此所で喜んだ處が學校も市當局も知事さんも何とも思はないかも知れぬが、其喜びを具體化する爲めには僕の娘は今年四つだが女學校に入れる樣になつたら、臺南の女學校へ入れる事にモーきめてしまつた、日本で女學校でプールを持てるのは臺南ばかりである、大ひに誇てよい事である、今から正しい訓練と、優しい

注意とによつて小女達を心行くかぎり泳がしたら嘸ぞ愉快でしよ、日本婦人の體格の改造は此所から生れませふ、幾年ならずして臺南からは母親の後から首丈け伸てる美しい娘さん達が出る事でしよふ、而して身體を伸々させると共に心も悠くり伸ばさせる事を忘れない樣にして下さい。

四　過渡期のテニス

臺灣のテニスは硬球から發達したものである、明治三十一年頃、淡水館と云ても知てる人も勘いが今の偕行社邊にあつた、非常に廣壯な支那建築で當時唯一の倶樂部兼公會堂であつた、其所の後庭に始めてコンクリートのコートを造られた、夫から臺灣ではコートはコンクリートで造るものと相場が極てしまつた、ボール、ネット、ラケットは皆な香港から直輸入したもので勿論硬球であ

つた、當時選手と云ふのは當路の御歴々の若手官吏で、後ちに殖產局長代理をしてた竹島慶四郎氏だとか大島久滿次氏などであつたと思ふが、此人達の練習振を見るに殆ど球の打ち還しが出來なく、始終アウトや引掛け通しで、球拾いの給仕を二三人も附けて居つた、這した練習に興味を惹かなかつたと見えて又色々な事情から間もなく止められてしまつたのは殘念であつた。若し其儘硬球が繼續されて居つたら臺灣から幾多の熊谷、清水が出た事であつたらふに、其後内地から軟球が移入されて非常な發達を遂げたのである、既に臺灣は二十年前に硬球の洗禮を受け試練を經て居るのである、近年に至り澎湃たる硬球熱が押し寄せ軟球は跡を絶ちはしないかと思はれる程であつたが、此頃は硬球は硬球で一部に發達し、軟球は益々普及、發達して來たのである、殊に本島人間に於ける流行は目覺しいものである、中に善い選手の出る事は注目に値すべき現

象だと思ふ、一方硬球は本年から兎も角リーグ戰を行ひ、鐵團が優勝した、同團に硬球を正式に採用する事は私達が卒先主張したもので、一所にやてた連中の手によつて優勝旗を獲た事は私にとりて考へ深いのである、ゴルフの相棒で鐵團の庭球部長をしてるU技師は、硬球は非常にエキスペンシーブだ、ゴルフより掛るよ、撰手などに氣の毒な位だと謂つて居られた、硬軟何れが面白いかと云へば、軟は硬に如かずと云はなければならないが、軟は軟で獨特の面白味がある、あの餘裕のある打方、其餘裕に種々の戰術を考へて居る人知れぬ興味、其等にも增して餘り金の掛らない、手取早い運働である點が殊に優れてる、多數の若い人達が一所に仕事をして行く處には、興味の中心として、人心を統一して行く上からも、惱ましい青春の血を所理して行く點からも、最も適當な方法である、這した問題は現業局に長たる方々に大ひに考へて貰ねはならないと

思ふ、遞信局のあのコートでは仕方がない、隣に土木の立派なコートが出來たのについても若い人達に氣の毒な樣にも思ふ何とかしたいものだ、病氣になればば醫者に藥代を拂ふではないか、運動保健の爲に金を出すのは喜ばしい事だ、昔はエホバの神に什一稅を献けたが、今はスポーツの神に收入一割を献げねばならないと、豫て私は主張してるのである。

〔大正十二年七月三十日〕

雜誌編輯者のことば

一

之を私は非常なる歡喜と致します、或る官廳的の地位に撰ばれた爲めに、規則上當然に一の雜誌の編輯を主宰するの特權を賦與せられると云ふ事は、洵に思ひも設けざりし幸福でありますから。

一つの仕事と云ふものを、之を人生完成の道程としての職業と見、或は生活內容擴充の爲めの使命と感ずるとしても、職業は矢張り生活の爲めの職業であつて、我々が官吏となり、今し遞信官吏となつたのも、母の胎內から世界交通に寄與する抱負を以て成つた譯でもなく、單に一の生活方法として、レーベンスミ

ッテルを獲る爲めの手段として、職業に置れるべく運命附けられたに外ならないのである。

凡ての人には職業と使命とがある、職業の全然無い者は放浪者であつて警察のリストに載る、無職者は有つても使命の無い者はない筈である、夫れは無使命者なる言葉さへないから、使命を受けないと謂ふのは其の人が感じないに過ぎない、或る人は大きな使命を負い、或る者は少さな聲を聞く、然し大多數の者は全然無關心である、否な之を聞かざらんとして拒否する、天才は大なる使命を聞く、夫れが大なる丈け之を負ふ者は苦痛である、大工を職業としたキリストは年三十にして使命を拒み得ずして遂に十字架に死なねばならなかつた、トルストイはその爲めにヤスナポリヤナの温き纒居を逃れて、寒驛を臨終の床とせねばならなかつた、天籟の聲を聞かされる盲目のベートベンには第九シンホニ

ーは確かに苦痛であつたに相違ない、ゴーガンも慾ひに繪筆を持たなければ一生巴里に株屋さんとして有福に暮されたであろふ。

使命者（ミッショナー）は偉大である、然し職業者（プロベショナー）を蔑みしない、凡ての者が使命に走つたら世界の進歩は想像し得ない、然し人が其の職業を使命と感ずる點に亦偉大がある、私として遞信官吏として、少くとも自分が遞信事業に絆る以前より、臺灣の否な世界の交通通信を、ヨリ良いものにしたいといふ大抱負を持たねばならぬ、之の道程を眞摯に進む時に職業が使命となるのである、ミッションなるものは之を感ずるの厚薄輕重により使命として感ぜず、趣味乃至傾向として現はれるのである、人に職業を奪い得るとしても、我には許せ敷島の道で、趣味傾向は奪い得ないものである。職業を奪ても猶其の趣味に趁れば其の趣味は其の人に使命となる、職業を離れて其の人に成立するものは使命卽ち天職であつて、職業を

離れて獨自の存在を許さざるものは趣味である、職業と趣味と共存一致する事は極めて望ましい事である、私のロジックの數學式を以てすれば其の場合に職業は使命に等しいものとなると云ふ事が出來るのである。

私にとつては物を書くと云ふ事は趣味である、勿論甚だ拙いものであるから下手の横好きに過ぎないが、然し確かに私の傾向と感じ得る、かるが故にこの雜誌編輯の仕事が、私の職業に當然附隨して居る事を非常なる喜びとし、此の特權を自己に飽き足る程に享樂し、與へられたる自由を擅にせんとして心躍るを禁じ得ないのである、此の意味に於て私の微力の限りを盡して、此の雜誌を少しでもヨリ良いものにしたいと思ふものである。

凡そ後より來るものは、總ての前きの者の施設を踏臺として、一歩を進むる事は、當然になさねばならない義務であるからである。

二

私共乏しきを以て編輯委員となりたる以上は、無給無償の執筆者たり編者たるの意味に於て、オノラリー・エジターを以て自任して居る次第である、我等は我等の眞摯なる叫びを發し、自由な忌憚なき主張と、權威ある希望乃至要求を述ぶる事を許してもらいたい、若し認めないと云ふなら仕方がない、之を認めしめる迄我等は奮鬪する迄だ、夫丈け眞劍だ。

或る公園に寫眞屋が一軒出來た、看板に「日本一」の寫眞屋なりと掲げた、隣に出來た寫眞屋は「東洋一」と書いた、其の隣の奴は敗けない氣を出して「世界一」と書いたが餘り流行らなかつた、元から其公園にあつた舊い寫眞屋は仕方が

ないから「公園第一」と書いたが結局此處が一番に繁昌したソーだ。

私共は遞信協會雜誌を怎麽しようふと云ふ大きな希望を持たないが、然し臺灣に於て發行する官廳的雜誌――それには夫々專門向々があるが少くとも我等と同一性質を有する雜誌の中で一番好いものにし度い希望を持つてる、私は此話を「××××」の編輯をしてる人に話をした、其人も私も一番好いものにしませふと云て居つた、夫れで善いのでお互に夫が臺灣の爲めに臺灣を善くする事なのである。

共同の所有を善くするには皆の力を以てしなければ駄目である、皆なで造り上げてこそ意義あるのである、月の初めに於て生れ出た嬰兒を胸の高鳴を以て抱き上げてこそ我が所有となり、自からの血となり肉となるのである。

私の云ふ意味のオノラリー●エジーターとして、私達と一所に此雜誌を押し出す生みの苦しみを共にせんとする人を戀ひ慕ふ。

三

マラルーメの詩にデユビシーは美しいオーケストラを附けてる、懶い樣な旋律をフルートが吹くとハープが續いて奏でられる、南國の夏の空氣は早くも其所に流れ出る、牧羊神は水の精の事を考へながら、甘い房の葡萄に舌つゞみを打ち、あたたかい陽を浴びて柔かい草の上に深い深い眠にと落ちて行く。――このブレルユードの樣な時がまた吾々にやつて來た、牧羊神の暢氣さが私共凡てに許されるであらふか、歌ふべきもの、奏で出するものがなければ其の牧羊神は寢てると見る外はない、私共の雜誌はレゾナンスボックス(共鳴箱)であるか

ら殊に良く夫れが解る樣に思ふ。

如何にさゝやかなる聲も、秘め隱さるゝ睦つごとも、腹ふくるゝの不平も、曠野の叫びも、我々と陟る範圍のものは、凡ては共鳴器に依て自由に發表されねばならぬ、其が唯一の安全辨でもある、若し寫さゞるの鏡、味を失ひたる鹽は捨てられる迄である、我々は奏でざるに風に諷して鳴るてふオルフオイスのリラでありたい、然るを何を苦んでか、或は新聞に或は投書に物言はんと欲するのであらふ、其人から見れば他に方法なく許さるゝ唯一の道と考へてるかも知れない、夫ならナゼ匿名を用るのであらふ、見苦きは自ら名乘らざる事である、而して其れが知れないと思つてる愚さよ、小さな人の智慧よ、隱るゝより現はれるものはない。

公企業官廳—現業官廳は、人民樣を政りごとする御役所とは毛色が違ふ、大勢の人が寄つて一所くたになつて仕事をするのである、油を指すもの、切符を切るもの、煙草を卷くもの、酒を釀くるもの、摘いたり、集めたり、配つたり、夫れが無ければ仕事にならない、小さな單調な仕事が年中不斷に續く、不平と嫉視と反問と爭鬪とは其所から生れる、止を得ない事だと云つて押へて置く譯には行かない、何處かに現れる醜い小さな形の現れが夫れだ、この蝸牛角上の小さな爭鬪を他に轉じて行く方法がある、夫れは上下を通ずる雍容淵々たる基調となる指導精神が無ければならない、スポートでもよい、音樂でもよい、協調主義でも、大家族主義でもよい、兎に角に部内を通じて脉胳一貫打てば響く血の出る樣な基調を造りたいと思ふ、之が絶對の必要である。

人間は電信をたゝいたり、貯金を出したり、入れたり、盲判を押したり、理窟をこねたりしに此世に出て來たのではない、詩を作つたり、歌を謠つたり、運動もしたり、散歩もせねばならぬ、人には夫々の境地がある、吾々は各自が人生の詩人であるのであつて、詩人には制作が生ずる、制作には表現が當然に必要である、其の對象として此雜誌を奬める、之に依つて私は部内を縱貫し、横溢する基本思潮として文學革命を主張したい、呼べども來らず、笛を吹けども踊らずでは仕方がない、牧羊神の午後は深い眠に落ちてるかも知れぬ。

四

人として恐るべきは心の乾燥である、殊に中老年に於て甚しいものである、乾枯れた心、培はれざる心、其處には何物をも受け容れる餘地は持たない、何

等新しいものを植えられる土を有しない、三十年、四十年持ち來りのドグマを振り廻して他は見向きもしない、這ふなると那麽によい本を讀でも何物をも感せしめない、受け容れる心がないからである、矧んや見るに足らない小さなもの、拙らないものから眞珠を見出そふなどは思ひも設けない處である、私達は其人に優しい心があるか、常に培はれた優れた魂があるかを、其人の受け容れる力から見極めようとする、私共の此の雜誌に對する小さな努力を振り回て見て下さる人の瞳を見る、それが小さなものであればある程に之を認めんとする人の持つ力は大きなものでなければならない、私共は若い多くの瞳を見る事を喜ぶ。

五

タイムス社主でつた故ノースクリーフ卿がハーヂンク大統領のインタービュの中に、ハーヂングの一番愉快の時は晩餐後煙草を喫いながらマリオンス●ター紙のゲラ刷を讀む時であらふと書いてあるが、之は操觚者ならでは知る事を得ない興味である、我々が公務の餘暇に編輯したり、書いたりして印刷所へ送り込み、月滿ちて生れる兒を待つ樣にしてゲラ刷を待ち、納本刷を取上げる喜びは、少くとも此雜誌に書いて下さる人のみは察して下さる事だと思ふ、此雜誌はつまらぬものであるかも知れぬ、然し此の喜びを廣く皆なに頒ちたい、そふして此雜誌の主觀的價値を高めたい、其爲めに成るべく多數の方に書いて頂きたい、或人は此雜誌を蔑視して、之れに何にも書かない事に依て尊嚴が增すと心得て居る人もある樣である、或人は之に書いて現實曝露の悲哀はよつて自己價値を傷附けない樣にして居る、嗚呼愚なる事よ。

六

私は這ふ考へて居る、役人をして居る間、役所の仕事さへ巧くやつて行けば夫で善いと謂ふものでない、一所に仕事をする人と其内部生活に觸れた範圍に於て、何か遺つて行く事が役所の仕事より餘程意義があるものである、而して行くことが取りも直さず役所の仕事を善くする所以であると思つて居る。

この年遞信部内に生活して、多數の人の内面生活の方向、部内人心の歸趨、碎けて云へば興味の中心を搜し尋ねんと試みた、之を野球に求めてCB團の昔に歸さんか時代は到底之を許さない。テニスに走らんか、あのコートでは興味味索然として多數人心を繼ぐべくも見えない、草山は餘りに高遠にして、倶樂部は少しく偏在に失して居る。然し求めれば常に與らへる、夫は此雜誌であつ

た、私は役所で何事をもなし得ずとするも此雜誌で何かせねばならないと考へた、我々十年、二十年の役人生活が何程價しませうか、然し我々が自由なる立場にて思索し、比較的坦懷に公表したものゝ方が、多くの制限と、改訂を加へられて仕出かした仕事より遙かに後ちに大きな波紋を殘さないとも限らないのである。Ars Longa Vita brevis である、我々が此雜誌に仕事をする事が藝術であるか怎うかは知らない、然し夫れは我々の役所の仕事よりは生命が永いものである事は明かである。

七

Mens Sana Corpora Sano とは幾千年の昔から謂はれた運動禮讃の言葉であつた、仕事を善くするには怎麼にしても運動する精神、運動をして得たる精神を

持たねばならない、新時代の人と共に仕事をし、人を統ぶる地位ある人は運動の體驗を持つ人でなければならない、然らば我儕は何を爲すべきやと云ふ問題にぶつかつて、亞熱帶植民地と云ふ事と、現代日本人の生活程度と勞働時間の三つを綜合して考察し、此問題の思索に體驗に沈湎すること八年にして得たる私の結論は、矢張希臘の哲人の謂て置いた言葉と同じ事に過ぎない卽ち Tenis Sana corpora sano で之を飜譯する迄もなく、這ふいふ事になる「健全なる身體は健全なるテニスを爲す事によりて得られる」然らば何をか Tenis Sana と云ふか、臺灣の現狀に立脚して、夫は軟式庭球であらねばならぬと斷言するものである。我儕が事務とるのには机や椅子が必要であり、湯呑場も、便所も、必要である、夫等は日本の慣習に從て設備されて居るのを見る、然し我儕に仕事を善くする爲めに必然の必要なるテニスコートが役所の重要々素として構成設計

せられないのを不思議に思ふのである、臺灣の役所の一つ一つが、コンクリートのテニスコートを持つ所は非常の意義のある事である、

八

ヤレ忘年會だ、新年廻禮だと云つて酒を飲めもしないのが無理に苦しい思いして飲んで歩るく、藝無し猿は仕方がないからデカンショウでも吐鳴るのが責てもの能だ、之が人生なのか馬鹿らしい事だ。

抑々デカンショウの言源を尋ぬるに、デカルト、カント、ショペンハウエルと云ふ事だソーだ。哲學書を讀んで半年を暮し、あとの半年は何をして暮さうと夫は幸福な事だ、年の初めから飲んで廻つて吐鳴て歩くのは愚の骨頂だ、

『我思ふ故に我あり』と謂つたデカルト、年中澁面作つて女の嫌いだつた、懷

疑思想のショペンハウエル、夫は爰では怎でもよい。我々は更生維新の初頭に當つて、もー少し精神的方面に醒めたい、神に醉へる人スピノザの敬虔な心や、『天に恒星運行の整齊たるを見、內に道德律の嚴存を觀ず』と謂つたカントの心情に還りたい、唯物思想の吹き荒む時に、精神主義に人格運動に還らねばならない、『カントに還れ』は哲學史上に於て屢々繰返される標言である、甲子の年、大正十三年、一九二四年は奇しくもカント誕生二百年に際會す、今年は世界に、日本に、我々一人一人に、其言葉が謂はねばならない年なのである。

〔大正十二年一月—十三年一月〕

大正十三年四月十日印刷
大正十三年四月十二日發行

定價 貳圓

臺北州臺北市書院町二丁目二番地
著作者 兼發行者 戸水昇
臺北州臺北市福住町二番地
印刷者 熊野太三郎
臺北州臺北市福住町五番地構內
印刷所 印刷工場
（電話八九五番）

版權所有

發行所 臺北市遞信局內 臺灣遞信協會
（振替口座臺灣一七〇番）

14年5月14日

調査済

52
208

終